

ボズネセンスコエ文化期土器の地域性

内田 和典

要旨

本論では、ロシア極東地域アムール下流域のボズネセンスコエ文化期の各型式細別や各土器文様の系統的な関係性、地域的特徴について分析した。分析のために、アムール下流域をアムール河口部周辺（地域Ⅰ）とスレードネアムールスカヤ低地帯（地域Ⅱ）に区別した。地域Ⅱはさらにエボロン湖周辺地域（地域Ⅱ a）と、アムール河とゴリン河・ウスリー河がそれぞれ合流する地点間の沿岸地域（地域Ⅱ b）に細分した。分析では、渦巻文や雷文、ジグザグ文土器を中心に各型式の内容を検討した。ボズネセンスコエ文化期は四段階の変遷が想定できる。

資料を検討した結果、(1) マリシェボ／ボズネセンスコエ文化移行期は、良好な一括資料や年代測定値が今のところ不明であるが、地域Ⅰ・Ⅱ bでは、①押引文による渦巻文・雷文、②地紋に押引文＋沈線による渦巻文・雷文、③充填櫛目文による渦巻文が存在。(2) 渦巻文土器は、マリシェボ文化期の精緻な渦巻文、(1)の②・③段階、ゴリン式前半：大振りな渦巻文や幾何学的な曲線文、ゴリン式後半：渦巻文やその間の連結が粗雑化。ウディリ式：さらに粗雑化・形骸化した渦巻文や円文、マラガバン式：変形した曲線文。渦巻文はゴリン式までは盛行するが、ウディリ式・マラガバン式で減少する。(3) 雷文土器は、初頭期：直線的な沈線で入組み状の雷文モチーフ。ゴリン式：雷文の形骸化した三角形モチーフ。ゴリン式からウディリ式には雷文が狭小化し、マラガバン式では消失する。(4) ジグザグ文土器は、ゴリン式やウディリ式では、ジグザグ文が地紋化するものやジグザグ文のみで構成されるものが併存する。(5) オレリ式については、マラガバン式と共通する属性が多く、同一系統の土器型式内の細分として捉える方が、時間的先後関係の整理がしやすい。(6) マラガバン式の以後については、無文土器の一群がコッピ式までの間に存在する。最近、提唱された「ルチェイキ式」との関係を含めて検討が必要である。

1. はじめに

アムール下流域新石器時代後半期に位置付けられてきたボズネセンスコエ（вознесенская）文化には、渦巻文や雷文、ジグザグ文といった特徴的な土器が存在する。ボズネセンスコエ文化期の土器型式編年については、多くの研究者によって検討され、おおよその変遷は分かり始めている（Шевкомуд 2004 など）。しかし、型式の細別や各土器文様の系統的な関係性、地域的特徴については、十分に議論されているとは言えない。そのため、本論では、アムール下流域をアムール河口部周辺（北東部）とスレードネアムールスカヤ低地帯（南西部）に地域区分をして、ボズネセンスコエ文化期の土器を型式学的に分類し、各地域での系統的な変遷を捉えて検討することにしたい¹⁾。

2. 研究史

2-1. アムール下流域新石器文化編年の構築と批判

アムール下流域の新石器文化研究は、オクラドニコフ（Окладников）А.П.によって本格的に開始された。オクラドニコフは、1930年代から70年代を中心にロシア極東アムール下流域の調査を精力的に

実施した。特に本格的かつ組織的に発掘調査を行ったスウチュウ（Сучу）島遺跡（Окладников1980）、コンドン（Кондон）遺跡（Окладников1983・1984）やボズネセンスコエ（Вознесенское）遺跡（Окладников1967・1972、オクラドニコフ 1975）などの資料を基礎として、アムール下流域新石器文化編年を築いた（Окладников1970、Окладников・Деревянко1973）。オクラドニコフによるボズネセンスコエ文化に相当する土器群は、ボズネセンスコエ遺跡の灰色砂質粘土層から検出された住居址出土資料が基礎となる。その土器群の内容は、櫛目・点状文による縦方向のジグザグ文と赤色磨研土器、頸部の狭い深鉢などが相当する（Окладников1967・1972）。この分類内容はその後さらに加筆されて、渦巻文土器、地紋に櫛目・点状文をもつ渦巻文土器、赤色磨研土器に人面が付くものとされた（Окладников・Деревянко1973）。

上記の1973年に刊行されたロシア極東考古学の概説書で、オクラドニコフと共著者であったデレビヤンコ（Деревянко）А.П.は、オクラドニコフによる新石器文化の変遷に、1970年代までに集成された放射性炭素年代値を与えて、各文化期の土器や石器の内

容を整理して、マリシェボ (мальшевская) 文化 (紀元前 5 千年～4 千年) →コンドン (кондонская) 文化 (紀元前 3 千年紀前半) →ボズネセンスコエ文化 (紀元前 3 千年紀末～紀元前 2 千年紀前半) と位置づけた (Делевянко1972)。デレビヤンコによって整理された各文化期の土器の内容は次のとおりである (Делевянко1976)。

マリシェボ文化期の土器は二群に分類され、第 1 群土器は、精製土器で、三角形の篋文による交互入組文や絡条体圧痕文をもち、第 2 群土器は、櫛目文を帯状に施文したモチーフを主体とし、あまり入念に整形されていない円錐形の器形となる。

コンドン文化期の土器は、渦巻文と編目文の組み合わせをもつ深鉢や、編目状の地紋にアムール編目文が施文されたものに雷文が組み合わされたものとされた。

そして、ボズネセンスコエ文化期の土器は、二群に分類され、第 1 群土器は、頸部と肩部の区分が明確ではない器形で、ジグザグ文や編目状の型押文等の様々な文様が華美に施されたもの。第 2 群土器は、特定または儀礼的な目的のために使用された浅鉢で、赤色磨研土器を代表とした。また、灰色粘土を用いた土器には、様々な文様を施文したものや人面文様をもつ土器などがあるとされた。

オクラドニコフやデレビヤンコの新石器文化編年を踏襲したメドベージェフ (Медведев) В.Е. は、アムール下流域新石器文化に、初期新石器オシポフカ (осиповская) 文化と前期新石器マリインスコエ (маринская) 文化を加えて 5 期に区分した (Медведев1995・2005・2008)。メドベージェフは、デレビヤンコ編年による年代測定を基にしながら、マリシェボ文化とコンドン文化の編年上の位置づけについて地域的な時間差による存続を想定した。ボズネセンスコエ文化の土器については、平底の「シチュー鍋形」、「壺形」、「球形」土器などで構成され、口縁は直立または外側に弱く開くとした²⁾ (Медведев2005・p.253-259)。製作技術上の特徴としては、輪積みまたは板状による成形方法をとる。文様は、多歯状の櫛や沈線によって描出され、垂直ジグザグ文、渦巻文、雷文などで構成されている。胎土に

は碎屑物、シャモットが混和されるとした。

オクラドニコフやデレビヤンコらによる文化編年は、図の提示が部分的であり、記述を中心に説明されたことや、出土層位や遺構状況の不確かさ、各文化期出土土器の分類属性の重複などがあり、詳細な変遷をたどることに困難さが残された (加藤晋 1989、大貫 1992a・b、加藤博 1998 など)。特に、アムール下流域新石器文化編年の最大の問題が、マリシェボ文化とコンドン文化の位置づけにあった (内田 2013・2021)。大貫静夫や福田正宏は、土器分類上の錯綜状況を鑑みた上で、前半期にアムール編目文を位置づけ、コンドン文化がマリシェボ文化よりも先行するとし、後半期に渦巻文を代表とさせるボズネセンスコエ文化を位置付けた (大貫 1992a・b・1998、福田 2007)。

アムール下流域新石器文化編年上のボズネセンスコエ文化の位置づけは、少なくとも後半期には位置付けられること、ジグザグ文や沈線による渦巻文をもつこと、赤色磨研土器のような精製された土器が存在することが、各研究者の共通見解と言えるだろう。

2-2. カリチョーム編年と年代階梯

シェフコムード (Шевкомуд) И. Я. は、アムール河口部周辺のウディリ (Удыль) 湖にある後期新石器文化期のカリチョーム (Кольчём) 遺跡群の出土資料を基に、出土層位と土器型式学的な検討を行い、ボズネセンスコエ文化期を三大別した「カリチョーム編年」を構築した (Шевкомуд 2004)。特にカリチョーム 3 遺跡及び同 2 遺跡の層位的区分に基づいて、土器の型式学的な分類を行い、各型式の時間的・地域的な位置づけを明確にした。シェフコムードは、ボズネセンスコエ文化期の土器をゴリン式 (горинский тип)、ウディリ式 (удыльский тип)、オレリ式 (орельский тип)、マラガバン式 (малогаванский тип) に四分類した。そして各型式をカリチョーム 3 遺跡と同 2 遺跡の文化層区分と遺構に伴う炭化物から得た年代を対比させて、ガリゾント (горизонт) В:ゴリン式 (4200BP、SOAN-3412)、ガリゾント Б:ウディリ式・オレリ式 (3980 BP、3905BP、SOAN-3014、3413)、ガリゾント А:マラガバン式 (3520BP、

時代	時期	アムール 14C 年代	スレドネアムールスカヤ低地帯 (南西部)	アムール河口域 (北東部)
新石器	後期	4700-4300	(マリシェボ / ボズネセンスコエ) ?	
		4300-4000	ボズネセンスコエ	ゴリン式
		4000-3700		ウディリ式・オレリ式
		3700-3400		マラガバン式
新石器時代晩期	[3400-3000]	?	ボズネセンスコエ / コッピ	
新石器—古金属器移行期	3000-2800		ウリル?	コッピ

※年代測定値は未校正。[] は先行研究による。

図 1 アムール下流域後期新石器時代ボズネセンスコエ文化の編年

TK-958) とした³⁾。

國木田大らは、ロシア極東地域新石器時代の年代に関する先行研究や日露国際共同調査を実施したマラヤガバニ (Малая Гавань) 遺跡等の調査で得られた年代を基にして、ボズネセンスコエ文化期の各型式の年代を絞り込んだ。國木田らによれば、ゴリン式 (約 4300 ~ 4000BP)、ウディリ式・オレリ式 (約 4000 ~ 3700BP)、マラガバン式 (約 3700 ~ 3400BP) とされた (國木田他 2011、國木田 2021)。また、マリシェボ文化からボズネセンスコエ文化の境界については該当する土器型式が不明であるものの、その移行期を約 4700 ~ 4300BP 頃とした。また、アムール下流域ではボズネセンスコエ文化に後続する型式として縄線文をもつコッピ式 (коппинского тип) が設定されている (シェフコムード 1998、Шевкомуд 2008) が、ボズネセンスコエ文化からコッピ式の境界は約 3400 ~ 3000BP とされた (國木田他 2011)。

シェフコムードや國木田らによって提示されたボズネセンスコエ文化期の土器型式編年と年代学研究の成果から、ボズネセンスコエ文化期は、初頭:マリシェボ/ボズネセンスコエ文化移行期、前葉:ゴリン式、中葉:ウディリ・オレリ式、後葉:マラガバン式の四段階の変遷が見込まれる (図 1)。

2-3. ボズネセンスコエ文化期の土器型式細分

シェフコムードによる型式分類では、器形、口縁部断面形態、文様の施文単位、文様構成、胎土混和材等の属性が基礎となる。特に、シェフコムードはボズネセンスコエ文化期の土器に特徴的な胎土混和材に着目し、その系統的な関係を重視した (Шевкомуд 2004)。ゴリン式では砂や小礫等の鉱物が、ウディリ式・オレリ式・マラガバン式では有機物 (貝殻破砕片・貝殻粉末) が混和される。混和材の特性は、土器製作において土器の厚さに特に影響し、ゴリン式では厚いものが多いのに対して、ウディリ式・オレリ式・マラガバン式では薄くなるといった違いが顕著に現れる。土器製作上の伝統とも言える技術的变化は、この時期の土器変化を捉える上で重要である。本論も基本的にシェフコムードによる型式分類を踏襲するが、各型式の細別と地域性については議論の余地があると考えられる。

シェフコムードによるカリチョーム編年は、アムール河口部 (シェフコムードは「アムール下流域北東部」とする) 周辺の資料を中心に構築され、さらに、スレードネアムールスカヤ低地帯 (シェフコムードによる「アムール下流域南西部」) の資料を加えて比較検討を行っている。ゴリン式やマラガバン式は広域に分布する型式であるが、ウディリ式とオレリ式はアムール河

口部周辺の地域性を有した土器型式であり、南西部地域ではその存在がよくわからない。また、オレリ式は口縁部断面形態や器形、文様構成においてマラガバン式と類似する点が多い。また、胎土への貝殻破砕片・貝殻粉末を加える混和技術についても、ゴリン式に相当する土器にも認められる場合がある。そのため、旧稿 (内田 2011a) では、アムール下流域全体の新石器文化編年を考えるために、混和材の問題や、ウディリ式やオレリ式などの地域性を強く現した土器型式については一旦保留にして、アムール下流域をひとつの地域的なまとまりとして捉えて検討を行った。旧稿でのボズネセンスコエ文化期の土器の細別は、ゴリン式を古段階、マラガバン式を新段階として、古段階のゴリン式をコンドン遺跡とカリチョーム遺跡群を念頭に二型式に細別して捉えたが、本論でも大枠ではこの考え方を踏まえることにしたい。

沿海地域とアムール下流域の新石器文化編年を広域比較の視点から検討した伊藤慎二も地域性については、アムール下流域を一つの地域的なまとまりとして捉えた (伊藤 2006)。伊藤は、ボズネセンスコエ文化期の土器を文様やその構成、口縁部断面形態などを基にして、古・新段階の二段階に大別し、さらに古段階を 2 期に細別した。古段階の口縁部と胴部との境界の文様の違いに着目し、古段階 a 期では口縁部無文帯下部に隆帯や段差をもつものから、古段階 b 期では横位区画内に充填櫛文をもつものへの変化が見られるとした。古段階では人面意匠文の土器や、渦巻文・雷文が盛行 (a 期) から渦巻文の簡略化・雷文の狭小化 (b 期) への変化が見られ、新段階では、口縁部に横位の隆帯を 1 ~ 2 条貼付したものや、口縁部が襟状または断面三角形に肥厚するもの、胴部にジグザグ櫛歯文のみ施文されたものがあり、渦巻文の消滅や雷文の簡略化された土器が少量伴うのみとした。シェフコムードによる型式分類との関係については、古段階 a 期がボズネセンスコエ遺跡上層出土土器やコンドン遺跡出土のボズネセンスコエ文化土器群、コンドン 38 遺跡 (旧:マリ 5 遺跡) 出土資料、b 期がゴリン式とウディリ式、新段階がオレリ式とマラガバン式に相当するとした。

ボズネセンスコエ文化期の土器型式編年の変化については、シェフコムードや伊藤、筆者らの編年でおおよそその変化の方向性は捉えられるものと思われるが、アムール下流域に広域に分布するゴリン式やマラガバン式の細別、ウディリ式やオレリ式の系統的な検討、各型式をとおして存在する渦巻文と雷文、ジグザグ文の変化については、アムール下流域各地での状況を再検討する必要がある。

3. 土器の型式学的分類

本論では、ボズネセンスコエ文化期を四段階に細分して地域別に土器型式内容を検討する。そこで分析の便宜上、アムール下流域を、アムール河口部周辺（地域Ⅰ）とスレードネアムールスカヤ低地帯（地域Ⅱ）に大別し、後者をさらにエポロン湖周辺地域（地域Ⅱ a）と、アムール河とゴリン河・ウスリー河がそれぞれ合流する地点間の沿岸地域（地域Ⅱ b）に分けて、各地域の遺跡出土資料を確認しながら検討を進めることにしたい（図2）。

3-1. 各型式の内容

以下では、シェフコムード（2004）や伊藤慎二（2006）、筆者による旧稿（2011 a）での分類を基にして、各型式の内容を整理した。まずはこの分類内容を基にして、地域別に各遺跡の出土土器の内容を検討する。

マリシェボ文化／ボズネセンスコエ文化移行期は、型式名が未命名である。スウチュウ島遺跡やボズネセンスコエ遺跡で当該期に位置付けられる土器が出土している。マリシェボ文化期の篋状施文具による押引文が地紋化し、渦巻文や雷文などが沈線で描出されている深鉢や浅鉢などで、赤色磨研土器となるものもある。

ゴリン式は、アムール下流域全域に分布する。器種構成は、深鉢や浅鉢、皿形・小型の土器などバリエーションがある。文様は渦巻文や雷文、ジグザグ文が中心となる。ジグザグ文にはいくつかの種類があり、直線的で細長い点線や短沈線を垂直に等間隔で施文するものなどがある。渦巻文や雷文が描かれる場合には、ジグザグ文は地紋化する。また、人面を模した文様をもつ赤色磨研土器も見られる。ゴリン式では器種間の文様の違いはなく、大型・小型土器でも共通した渦巻文や雷文、ジグザグ文をもつようである。

ウディリ式は、文様や器形でゴリン式と共通する点が多いが、有機物混和材を含む土器が多くなる。ウディリ式は深鉢を中心に構成されるが、土器のサイズはゴリン式よりも中・小型のものが多くなり、大型土器は少ない。土器サイズの違いは文様構成にも影響し、大型のものにはジグザグ文、中・小型のものには渦巻文や雷文が描かれる。渦巻文は消失傾向にあり、変わって複雑に曲線を組合わせた文様が見られるようになる。また、ウディリ式には一定数の無文土器がある。

オレリ式は、有機物混和材を含むもので、サハリン北部のイムチン（имчинская）文化の土器との関係が深い。サハリン北部のイムチン文化の土器には一般的に海水性・汽水性の貝殻破砕物・粉末を胎土に混和させるといった特徴がある。深鉢の口縁部には数条

の沈線が巡り、胴部には櫛目・点状の垂直ジグザグ文や斜行の櫛歯文、爪形文、格子目状の文様などがある（Шубин・Шубина 1984、Яншина 2018、福田 2018）。口縁部文様がオレリ式と共通する。マイルニコバ（МЫЛЬНИКОВА）Л. Н. は、かつて「プロトボズネセンスコエ伝統」という概念で中国東北部新石器土器の製作技術中に、貝殻混和材があることから、ボズネセンスコエ文化形成の起源と考えた（МЫЛЬНИКОВА 1999）。しかし、シェフコムード（2004）が指摘するように年代や分布状況の違い、土器型式学的な交渉状況からサハリン北部との関係性が強いものと考えられる。

マラガバン式は、櫛目・点状のジグザグ文が多くなり、口縁部の断面形態が襟状や三角形状になるといった特徴をもち、ゴリン式同様にアムール下流域全域に分布する。また、ジグザグ文以外にも無文土器が高い割合で存在する。

3-2. 地域別検討

3-2-1. 地域Ⅰ

アムール河口部地域は、キジ（Кизи）湖やウディリ湖、ダリジャ（Дальжа）湖、オレリ（Орель）湖等の淡水湖が数多く点在し、その周辺に新石器文化期の遺跡が数多く確認されている。オクラドニコフの調査以来、数多くの発掘調査や試掘調査が実施されてきた地域であり、ボズネセンスコエ文化期の土器資料も充実している。

・スウチュウ島遺跡

スウチュウ島遺跡は、ハバロフスク地方ウリチ地区マリインスキ村近郊の小さな島（Шушчя）山）にある。1935年のオクラドニコフによる本格的な考古学調査以来、1968年、1972年～1975年、1977年、1992～1999年、2000～2002年にわたり継続的な調査が実施されて、マリシェボ文化期やボズネセノフカ文化期の竪穴住居が発掘調査された（Деревянко・Медведев 2002）。露韓国際共同調査（Деревянко и др 2000・2002・2003）による24～27号・83・84号住居址の内、24～27号住居址は、床面から出土している土器の内容から判断してマリシェボ文化期のものと考えられる。特に24号住居址及び26号住居址の床面からは、マリシェボ文化期の押引文による渦巻文や櫛目文の深鉢が出土している。前者ではそれらに伴って、櫛目文による雷文をもつ深鉢（図3-2）がある。また、後者では、内側に張り出す受口状の口縁で、内傾する球形状の深鉢が出土する（図3-4）。図3-4は、口縁に二条の直線と円形（渦巻か？）、三角形を組み合わせた文様構成をとり、文様は細い充填櫛目文によって表現され

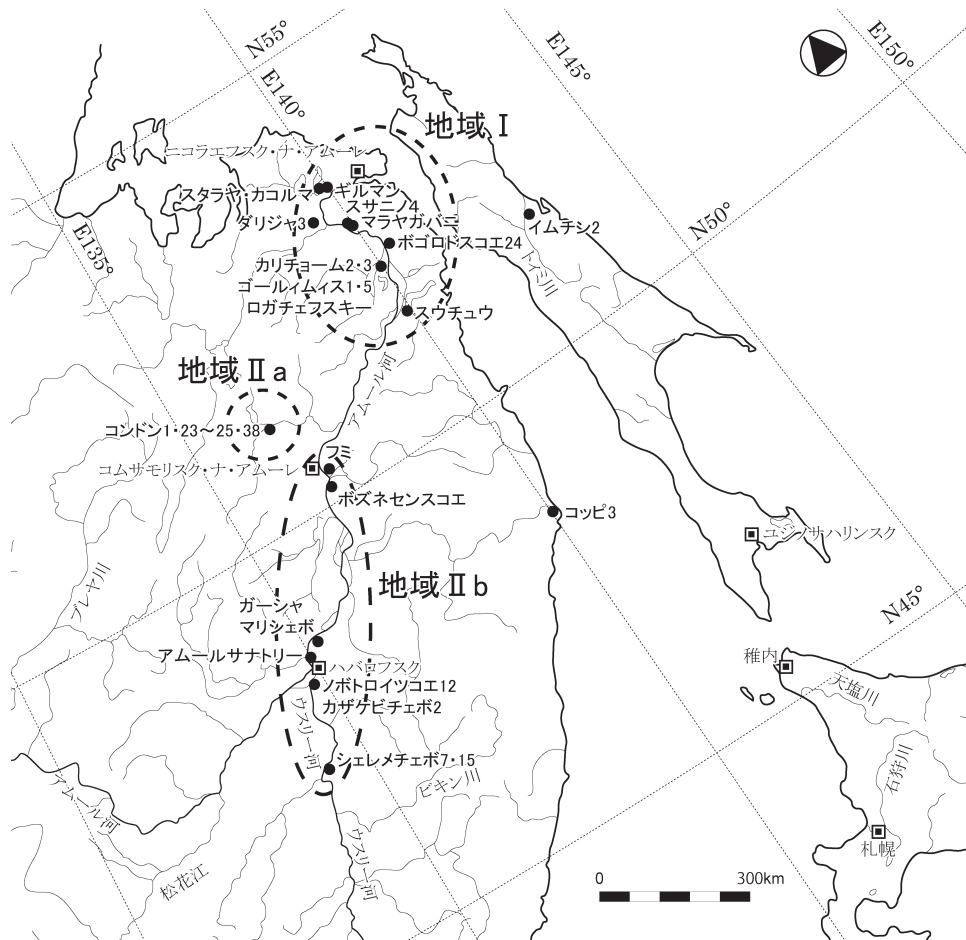


図2 本論で言及するボズネセンスコエ文化期の遺跡

ている。同様の充填櫛目文土器は、24号住居址の上層からも出土している(図3-3・5)。

26号住居址埋土上層からは、ボズネセンスコエ文化期の土器が多く出土している。ゴリン式に相当するものであり、口縁部に無文帯があり、内傾または直立する口縁で、丸みのある深鉢が中心となる。口縁部と胴部との間には隆帯による区画をもつ(図3-7~10、12~15)。隆帯上にジグザグ状(図3-7)または斜行状の短櫛目文を施文するもの(図3-12~14)、隆帯をユビツマミして波状にしたもの(図3-8~10)などがある。図3-7・8・13は、隆帯にジグザグ状短櫛目文や波状文をもつ深鉢で、地紋に直線的で密な垂直ジグザグ櫛目文を全面施文し、その上に粗雑化した渦巻文を描出している。地紋に櫛目文をもたない沈線文で文様を描出する深鉢には、二本の沈線で曲線文(図3-9)やジグザグ文(図3-10)が描かれたものがある。図3-11は雷文系の逆L字形の文様をもち、図3-14は口縁が外側に開く深鉢で、胴部に二本一対の沈線で「×」字形の文様構成となる。図3-15の胴部のジグザグ文は沈線で描かれている。図3-6は、浅鉢であり、渦巻文が大きく描かれ、連結する渦巻文間に「V」字形文を充填して配置してい

る。図3-16は、器高の低い鉢である。外面に入組状の渦巻文を4単位配して連結させ、さらに底部にも一筆描きの円形文が描かれている。図3-1は、埋土下層から出土した大型の深鉢である。完形土器ではないため、正確な文様構成は分からないが、口縁部には無文帯があり、上端と下端を3条の沈線によって区画しているようである。口縁から胴部上部(?)には、2条の沈線によって縦横に区画されてパッチ状となり、各内部を大ぶりの櫛目による斜行または目の細かい横走る櫛目文で埋められている。目の細かい横走る櫛目文を地紋とする区画には、曲線文が描かれ、さらにその内部に円形刺突文がある。胴部から底部の部位が同一土器であれば、下半部は目の細かい横走る櫛目文を地紋として、曲線文間を連結させて、幾何学的な文様を描出されている。底部付近の無文帯は赤色磨研となる。全面を櫛目文で埋め尽くすこと、沈線による曲線文、赤色磨研といった特徴からゴリン式よりも古い段階に位置付けられるものと考えられる。

近年、メドベーデフやフィラトバラによって1970年代の発掘調査資料が報告されている(Okladnikov and др 2015、Медведев・Филатова 2018a・bなど)。1974年調査区Iからは海棲の貝



図3 地域Ⅰ スウチュウ島遺跡出土土器

(1～16：ゴリン式、17～20：ウディリ式、21～26：オレリ式、27～39：マラガバン式)

殻破碎片を胎土に含むウディリ式土器が出土している(図3-17～20)(Медведев・Филатова 2018a・p26)。17・18は小型土器と考えられる雷文土器である。17は細い沈線で多重の方形モチーフになり、18は幅狭の方形の雷文となる。楯目文が充填されてい

るのか、磨り消されているのかは判然としないが、無文帯をもった雷文である。19・20は胴部前面を覆うように、沈線による密な垂直ジグザグ文が施文された深鉢である。19は口縁端部が弱く外反し、口縁部無文帯下には刺突文による区画帯がある。

1972～1974年調査区の住居埋土から出土したオレリ式土器がある(図3-21～26)。口縁外面に隆帯をもつもの、短沈線による刻み文をもつものなどがあり、21のように口縁が弱く外側に開き、二条の隆帯上に刻みがあるものや、23・24・26のように頸部に屈曲をもち、胴部が無文となったりするものがある。ただし、23や24は隆帯上に短櫛歯文を施文するものであり、ゴリン式やウディリ式のような区画文であるが、器形はオレリ式の特徴を有しているため、折衷的なものかもしれない。

83号住居址は、平面形が円形となる直径約13m、深さ1m以上の大型住居址である(Деревянко и др 2003)。住居埋土上層や住居址外でマラガバン式土器が出土している(図3-27～35)。櫛目・点状によるジグザグ文をもつものであり、口縁断面形態が三角形状となるもの(図3-27～29)、肩部をもち口縁が直立するもの(図3-30～32)、口縁が短く外側に開くもの(図3-33～35)などがある。32は櫛目・点状文による三角形のモチーフをもつものである。

図3-36～39は、メドデーチェフらによって終末期新石器時代に位置付けられている無文の深鉢である。36は、口縁断面形態や口縁が短く外側に開くことなどからマラガバン式に含められる。37～39は丸みのある寸胴形の深鉢である。口縁が直立して肥厚し、器壁が厚くなる。マラガバン式にはない特徴的な属性である。スウチュウ島遺跡の出土資料は詳細な出土状況がわからないため、こうした無文土器の一群と共伴する土器型式がわからないが、マラガバン式以後の段階に位置付けられる可能性はある。このことについては後述する。

なお、6号住居址では櫛目・点状の垂直または水平ジグザグ文が、7号住居址でも同様の土器が出土している(Деревянко・Медведев 1997)。5号住居址では、マリシェボ文化期の押引文による渦巻文土器が出土している(Деревянко・Медведев 1997)。口縁部と胴部との区画が隆帯となり、隆帯上に綾杉状または交互斜方向の櫛歯文をもつなどゴリン式との共通点も多い。Деревянко・Медведев 1997のРис. 1-4は、地紋化した櫛歯文が施文され、押引文による渦巻文をもち、口縁部と胴部の区画に横走る刻み状の押引文が施文されていることなどゴリン式との系統的な関係が想定されるものである。また、ローラー型施文具も出土していることから、ゴリン式の櫛歯施文とも共通する。ローラー型施文具はスウチュウ島遺跡の他の住居からも確認されている(内田 2011b)。

・カリチョーム3遺跡(Шевкомуд 2004・pp.13-27)
遺跡は、ウディリ湖に流れ込む小川の河口付近に位置し、水面よりも3～6m程の高さのある台地上に立

地している。約100軒ほどの住居の窪みがあり、その内の半数以上が直径4～11mの円形のものである⁴⁾。

新石器文化層はガリゾントA・B・B・Γの4層に区別され、ガリゾントΓは上層から破壊を受けてほぼ残されていないが、マリシェボ文化期の遺物が出土した。

ガリゾントBから検出された住居址IIは長方形プランの竪穴住居であり、埋土の厚さが40cmとなり、保存状態は良好である。住居址中央から炉址(2.0×1.0m)が検出された。炉址内から得られた木炭の年代値は4200±60BPである。ガリゾントBや住居床面からはゴリン式の渦巻文や雷文土器(図4-1・2)が出土している。図4-1～4は、口縁が直立するか頸部で弱く外反する深鉢である。図4-1・3・4は、粗雑な渦巻文が描かれ、三角形文が充填されている。渦巻文間は斜線で連結されているが、文様帯の下端処理がわかる資料がないため閉じられているのか、開放されているのかはわからない。雷文(図4-2)は、凸字状の文様構成となり、上端は連結する。図4-5～9はコップ形のような小型土器である。渦巻文を組み合わせた幾何学的な文様になると思われる。

ガリゾントBからは住居址A・B・Жが検出された。住居址Aは長方形プラン(4.0×4.0m)で、炉址が2基ある。住居址Bは不整形な長方形(6.5×6.0m)となり、床面には楕円形状の炉址(1.6×1.6m)がある。ガリゾントBからはウディリ式土器が出土しており、図4-13・14・16・17は深鉢である。13・14は口縁が外側に開く深鉢であり、沈線によって胴部に曲線状の幾何学文や、雷文とジグザグモチーフをもつ。16は口縁が肥厚し、口縁部無文帯下に斜行状の区画文がある。胴部は全面に直線状の垂直ジグザグ櫛歯文が施文されている。17は内傾する深鉢であるが、文様構成は16と同様である。またこの他にも文様や器形などからウディリ式の土器片があり、図4-10～12は渦巻文や曲線文が大きく描かれた小型土器である。

オレリ式は床面から出土した(図4-27)。この他にも床面出土ではないが、口縁形態からオレリ式に相当する土器が多く出土している。特徴として、寸胴形で無文の深鉢で、口縁に隆帯をもつもの(図4-19～23)、沈線をもつもの(図4-24・26)、断面形態を三角形にする際の浅い凹みが外面にめぐるもの(図4-25・27)などがある。隆帯をもつものは、短刻み文や斜行の短櫛歯文となり、頸部にくびれがあり、口縁は直立または弱く外反する。沈線をもつものや断面形態三角形のものは、頸部で強く外側に屈曲させるものである。

ガリゾントAからは、隅丸方形の住居址Bが検出

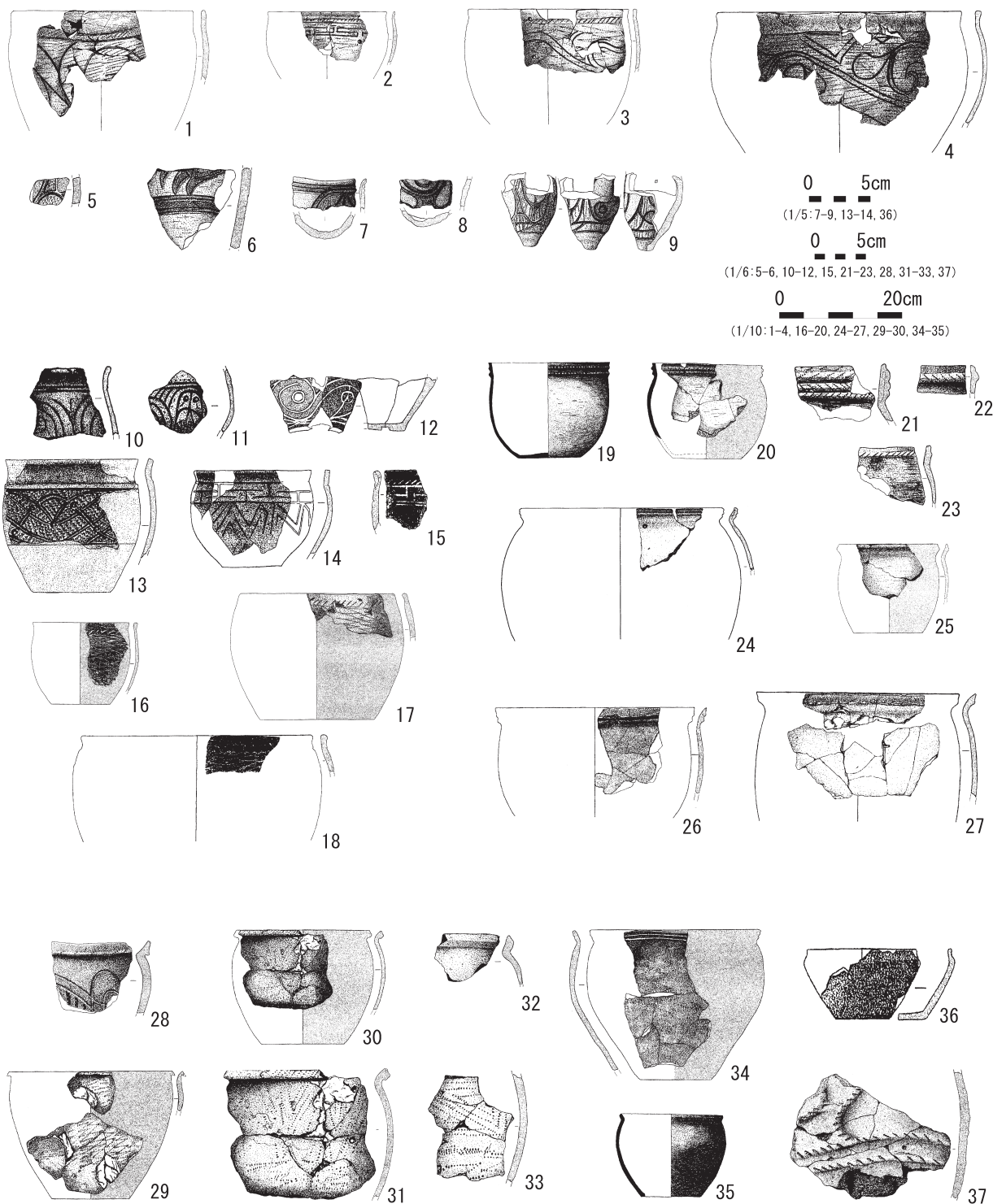


図4 地域Ⅰ カリチヨーム3遺跡出土土器
(1～9：ゴリン式、10～18：ウディリ式、19～27：オレリ式、28～37：マラガバン式)

され、床面には2基の炉址がある。住居床面からはマラガバン式土器が出土した(図4-29・31・34・35・37)。この他にも床面出土ではないが、口縁の形態や櫛目・点状ジグザグ文といった特徴からマラガバン式に相当するものがある。胴部に櫛目・点状の垂直ジグザグ文が施文され、頸部で強く外側に屈曲し、口縁は外側に短く開く。口縁の口縁断面形態が三角形状となるもの(図4-28～32)、二条の沈線がめぐるもの

(図4-34)等がある。図4-36は小型土器である。図4-37は胴部に刻み隆帯で曲線状の文様を表現している。図4-28は曲線状の文様を胴部にもつ。全体のモチーフはわからないが、渦巻文が形骸化したものであろう。また、図4-31は櫛目・点状による垂直・水平ジグザグ文で構成されている。図4-32は櫛目・点状文による三角形状の文様モチーフをもつ。

・カリチョーム 2 遺跡

ウディリ湖に流れ込む小川の右岸付近の岬にあり、2～3 m 程度の台地に位置する。カリチョーム 3 遺跡からは西に 1 km 離れた地点にあり、本遺跡では 100 軒以上の竪穴住居の窪みが確認されている。竪穴住居は、隅丸長方形となり、長軸 4～12 m、深さ 0.3～1.2 m 程度の規模となる。古金属器文化層の下部にある新石器文化層は、ガリゾント A・B に区別されている（Шевкомуд 2004・pp.27-32）。ガリゾント A は住居址 A の埋土である。住居址 A は不整形な円形で埋土の厚さは 15～30 cm 程度となり、中央に炉址（2.3 × 2.4 m）をもつ。ガリゾント A からは 3 点の年代測定値が得られた。住居址 A の埋土から検出した住居の屋根材と考えられる木炭が 3725 ± 95BP、住居床面からの木炭が 3830 ± 30BP、住居中央炉址から出土した樹皮が 3790 ± 40BP である。

ガリゾント B の大部分は住居址 A によって掘り込まれており、5～20 cm の薄い堆積となる。検出された竪穴住居 B の中央部には炉址（2.5 × 1.6 m）がある。埋土内からの出土土器はほとんどなく、住居外にあるピット群から図 5-29 の渦巻文土器が出土している。住居中央部炉址から採取した木炭から得られた年代測定値は、3880 ± 35BP であり、ガリゾント A に近い値が得られている。

住居址 A・B ともに床面からウディリ式土器が出土している。図 5-29～32、37～39 は小型土器である。37～39 は器壁の厚いものであり、37 は細い沈線で雷文、渦巻文、ジグザグ文が組み合わされた文様構成をとる。38 は胴部前面に円形刺突文をもち、39 は無文である。

図 5-44・45、51～54 はジグザグ櫛歯文土器、57・58 は口縁に斜行の短沈線である。44・45 は口縁が短く外側に開く深鉢である。口縁部下の無文帯の直下に半円形の沈線文が胴部文様との区画となる。胴部には直線的な垂直ジグザグ櫛歯文が施文されている。

図 5-64・65 は口縁に一条の沈線がめぐるオレリ式土器である。口縁形態は直立するもの（64）や、外側に開くもの（65）がある。

本遺跡からはマラガバン式土器も出土する（図 5-69～72）。69～71 は小型土器である。69・70 は口縁断面が三角形状となり、71 は口縁が外側に強く開く。72 も口縁断面が三角形状となる深鉢で、口縁外面は面取りされて平坦となり、胴部には櫛目・点状による垂直ジグザグ文をもつ。

・カリチョーム 1 遺跡

遺跡はウディリ湖に注ぐ小川左岸のテラス上に立地する。隅丸方形や円形の竪穴住居の窪みが 40 基以上確認されており、シェフコムードによって住居址

間の窪みの外側で試掘調査が行われた（Шевкомуд 2004・pp.38）。下層からボズネセンスコエ文化期の土器が出土した。図 5-60・61 は無文土器で、前者は小型土器、後者は口縁が外側に開く深鉢である。

・ゴールィムイス（Голый Мыс） 5 遺跡

遺跡は、岩肌が見える多くの岬地形が発達し、小さな湾がいくつもあるが、その内の一つである台地上（湖水面高 15m）にある。53 基の竪穴住居の窪みが残されている。住居の分布は、砂丘上と小さな谷付近の台地上にあるものに分かれる。シェフコムードによる試掘調査では、古金属器時代と新石器時代の文化層が確認されている（Шевкомуд 2004・pp.32-36）。竪穴住居址が調査されたが、新石器文化層の大部分は古金属器時代の住居構築の際に破壊を受けている。そのため、古金属器文化層からも多くの新石器文化の土器が出土している。ウディリ式やオレリ式土器が出土している。

図 5-28、33～36、40 は浅鉢や小型土器である。28 は渦巻文、33・34 は雷文土器である。図 5-35・36 は器壁が厚い鉢であり、口縁部上端面に並行沈線と短沈線文をもち、36 は外面に逆凸字形の沈線による雷文をもつ。

図 5-46・47 は、口縁部下に無文帯があり、その下部に沈線による半円形文が横方向に展開し、胴部に弧状の垂直ジグザグ櫛歯文が施文されている。46 は内傾する深鉢で口縁端部が弱く外反する。47 は直立する口縁部が肥厚する。図 5-48・49 は垂直ジグザグ櫛歯文土器で、口縁部は肥厚し、弱く外反する。

図 5-66 は直立する口縁をもつ無文の深鉢である。口縁端部は弱く外反する。口縁外面には浅い凹線による段が作出されている。オレリ式に相当するものと考えられる。

・ロガチヨフスキー島（о.Рогачёвский）遺跡（別称：カリチョーム 7 遺跡）

カリチョーム遺跡群の一つであり、ウディリ湖にある小さな島で発見された遺跡である（Шевкомуд 2004・pp. 36-38）。遺跡は湖水面から 6～8 m 上に立地する。シェフコムードが調査を実施した際には湖水は干上がり、氾濫原が形成されていた。シェフコムードによる試掘調査で得られた土器は、ゴリン式（図 5-7～14・18）とマラガバン式（図 5-67・68）である。

ゴリン式は、二本の沈線間に櫛歯文を充填したり、地紋化した密な櫛目文をもち、二条の沈線で渦巻文または円形文が描かれたりするものがある。いずれも破片資料であるが、図 5-14 は器壁が分厚く、赤色磨研された土器の底部である。また図 5-13 は、貝殻腹線文を一定範囲に施文した後に渦巻文（または円形文）

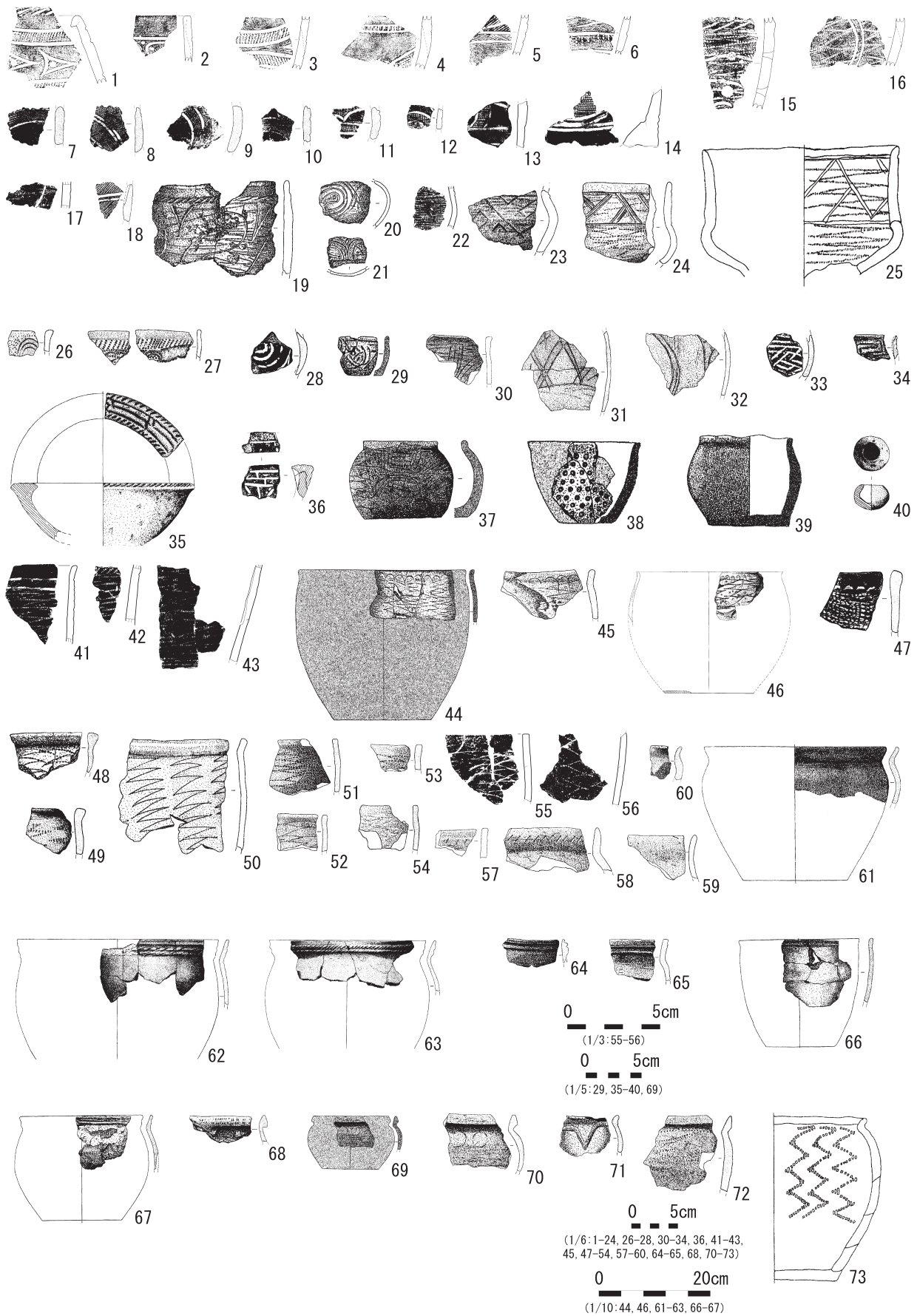


図5 地域Ⅰ 出土土器（1～25：ゴリン式、26～61：ウディリ式、62～66：オレリ式、67～73：マラガバン式）

を描き、沈線間の外側を磨り消している。

マラガバン式土器は、口縁外面に一条の沈線をめぐらせるもの(図 5-67)、口縁部の断面が三角形になるもの(図 5-68)がある。67 は、器面の剥落と磨滅のため、わかりにくいだが胴部の一部に、櫛目・点状文による垂直ジグザグ文をもつ。

・ダリジャ (Дальжа) 3 遺跡

ダリジャ湖はアムグニ河下流域の低地帯にあり、隅丸長方形の竪穴住居の窪みが 16 基確認されている。シェフコムードは住居址間の窪み外の箇所を試掘調査を実施し、新石器文化を確認した。ボズネセンスコエ文化期以外の時期の遺物は出土していない(Шевкомуд 2004・pp.44)。

図 5-55・56 はウディリ式のジグザグ文土器である。55 は弧状の沈線による垂直ジグザグ文である。口縁は直立し、口縁部下は無文帯となる深鉢である。56 は弧状のジグザグ櫛歯文の胴部破片である。

・マラヤガバニ遺跡

マラヤガバニ遺跡は、アムール河口域のハバロフスク地方ウリチ区スサニノ村から約 7 km 上流側に位置する。遺跡はマラヤガバニ湖とガバニ湖からの小川とに挟まれ、岬上で比高差 3 m 前後の台地上に立地する。隅丸長方形や円形状の住居のくぼみが 96 軒確認されている。

2007 年度第 1 発掘区第 1 区画 II a 層からボズネセノフカ文化の土器が出土した(福田ほか編 2011)。また、2008 年度第 2・3 区画からも出土している。第 1 区画 II a 層出土土器は破片であるが、図 5-17 以外はすべて貝殻粉末を含むものである。図 5-17 は渦巻文土器の胴部破片、図 5-22 は雷文と考えられる小型土器の胴部破片である。口縁部と胴部の間に区画をもつジグザグ櫛歯文土器(図 5-41)は、同一破片と考えられる胴部(図 5-42・43)も含めてウディリ式である。なお、内田 2011 で触れた 2008 年度資料についても、その多くはウディリ式に相当すると考えられる。

1985・1986 年のコノパツキー(Конопацкий) A.K. による調査区からは、口縁が直立する浅鉢がある(図 5-25)。口縁部と胴部で文様帯が分かれる。口縁部には沈背による横方向に展開するジグザグのモチーフをもち、地紋に直線的かつ細かな垂直ジグザグ櫛歯文がある。胴部は櫛歯文のみである。後述するスサニノ 4 遺跡出土土器とよく類似する。

図 5-73 は口縁が短く外側に開く深鉢である。胴部には粗雑な垂直ジグザグ櫛歯文が施文されている。

・スサニノ 4 遺跡

スサニノ 4 遺跡は、アムール河に流れ込むスサニノ川との合流地点の 6～8 m 程の台地に立地する。

1983 年、1984 年にコノパツキーによって住居址間と新石器住居の一部が発掘調査された(Конопацкий 1986・1990)。住居址埋土や住居址外の大部分が上層の古金属器時代からの破壊を受けているため、遺物が混在している。一部で新石器文化層が確認されたものの、中期前半のコンドン文化や後期のボズネセンスコエ文化の遺物が出土している。後者にはゴリン式とウディリ式の土器がある。

図 5-19～20 は渦巻文土器である。19 は口縁が直立する深鉢である。地紋に直線的で細かな垂直ジグザグ櫛歯文があり、粗雑な曲線文が大きく描かれ、曲線文の間には三角形文が充填されている。20・21 は丸みをもつ浅鉢で、胴部に細い沈線による渦巻文をもつ。図 5-23・24 は雷文が描かれた浅鉢である。23 は沈線による雷文をもち、24 はマラヤガバニ遺跡出土土器(図 5-25)と文様が類似する。

図 5-26・27 は円形文をもつウディリ式の深鉢の口縁部である。27 は口縁部下に無文帯をもち、斜行の櫛歯文が横方向に展開し、区画文としての役割を果たす。

図 5-50 は、口縁が短く外側に開く深鉢で、胴部に弧状の垂直ジグザグ櫛歯文が施文されている。

・スタラヤカコルマ (Старая Какорма) 遺跡

オレリ式がまとまって出土した遺跡である(Шевкомуд 2004・pp.46-47)。遺跡はオレリ湖に流れ込むパリビンスク(Пальвинск)支流との合流点に位置する。岬地形となる川面からの高さ 5～6 m の台地上にある。約 200 軒程度の住居の窪みが確認されている。1989 年ロサン(Лосан) E.M. によって発掘調査が実施された結果、3つの文化層が確認された。上部 2 層は、それぞれ鉄器時代のポリツェ文化やテバフ文化、中世初期のものである。下層の新石器文化層からは直径 3 m 程度の円形状の遺構(竪穴住居か)が検出されたが、上層からのピットやその他の遺構によって破壊を大きく受けているものの、新石器文化期の土器集中が数箇所確認された。調査者のロサンによっていち早くこれらの遺物がサハリン北部のイムチン文化と関連することが指摘されており、一部の土器の付着炭化物の年代測定を行って 4406 ± 22 (NUTA 2-7571) が得られた。

図 5-62・63 は、口縁が外側に開き、胴部に丸みがある深鉢である。口縁外面には、二条の隆帯がめぐり、斜行の短沈線文が施文されている。胴部は無文である。

・ギルマン (Гырман) 遺跡

アムール河本流左岸部に位置し、本流に流れ込む支流ギルマン河右岸の河岸段丘に沿って遺跡は立地する。上層では古金属器時代の文化層、下層では新石器時代の文化層が確認された。特に下層の新石器文化層からは、コンドン、マリシェボ、ボズネセンスコエ各

文化期の遺物が出土した。ボズネセンスコエ文化期の土器はゴリン式のものである。図5-1～6は充填櫛目文、図5-15・16は地紋に直線的な垂直ジグザグ櫛歯文をもち、沈線で渦巻文が描かれる。図5-1は内傾する深鉢であり、口縁端部は内側に屈曲されている。上下の充填櫛目文の間に、三叉文が配されている。

3-2-2. 地域II a

スレードネアムールスカヤ低地帯の内、アムール河の本流から内陸に位置する地域である。ゴリン河によってアムール河とつながる。エボロン湖周辺には、竪穴住居の窪みがかなり密集しており、数多くの遺跡群が確認され、その一部で発掘調査が実施されている。

・コンドン1遺跡（旧：コンドン郵便局遺跡）

本遺跡は、コンドン村近郊のジェビャートカ川右岸に位置する。1962・1963・1871・1972年にオクラドニコフらにより発掘調査が実施された（Окладников 1983）。全住居の層位状況を検討したシェフコムードによれば本遺跡は共通して4つの層に分類され、1：表土、2：灰色がかった黄色層または黄色がかった灰色層（住居埋土よりも上部に堆積。住居址間の基盤土を覆う。）、3：濃灰色層（住居埋土）、4：明黄色層・基盤土とされた（Шевкомуд 2004・p.58）。ただし、シェフコムードによれば、本遺跡では単純な文化層をもつ住居址がなく、中期前半のコンドン文化期の住居を再利用してボズネセンスコエ文化期の住居が構築されているため、住居埋土には時期を違える資料が混在しているといった問題を内包している。シェフコムードは、住居の再利用を前提として、出土土器の検討を行った上で、1・2層にコンドン文化期、3層にボズネセンスコエ文化期の土器が主に出土する可能性を指摘し、発掘された全住居の内、1～3、6、7、13、14号住居址がボズネセンスコエ文化期の住居址である可能性があるとした（Шевкомуд 2004・p.58）⁵⁾。

3号住居址の検討をした加藤博文も、コンドン1遺跡の住居址一括出土土器の多くが、床面または床面直上の埋土下部から出土していることから、一定の時期的なまとまりを示しているとした（加藤博 1998・p.46）⁶⁾。本遺跡から出土するコンドン文化期の土器については、すでに型式学的な検討を行っているため（内田 2021）、住居埋土出土の内、当該期の土器については除外することができる。まずは本遺跡3号住居址下層から床面から出土した土器を中心にして内容を確認することにした。

3号住居出土資料は、渦巻文土器（図6-1・2・6・12～15・23）と雷文土器がある（図6-21）。胴部資料である23以外は、口縁部下部に無文帯をもつこ

とが共通する。1・2・6は、口縁部と胴部の間の区画として隆帯がめぐる。沈線間が幅広の渦巻文土器を描出する。12は区画文が沈線文となる。13～15では口縁と胴部の間に段が作り出されて、区画の役割を果たしている。これ以外の区画文として図6-9～11のように波状文によるものもある。渦巻文土器は、深鉢のサイズで2種類に分けられ、口縁径よりも器高が上回るものと、口縁径と器高がほぼ同じか器高が低い寸胴形になるものである。

23は磨消櫛目文土器である。曲線的で幾何学的な文様をもち、沈線文で下端区画されている。また図6-22は、頸部が窄まる壺形の深鉢である。肩部と胴部に文様帯が分かれる。上部は渦巻文と三角形文、下部は幾何学的な円形文の文様モチーフをもつ。

21は雷文土器であり、口縁が直立して開く浅鉢である。挟り込まれるように深い沈線によって「人」字形のモチーフを配している。先述したスサニノ4遺跡やマラヤガバニ遺跡出土土器の文様モチーフに類似している（図5-24・25）。

渦巻文土器は土器のサイズに違いが見られるが、雷文土器（図6-18～21）や垂直ジグザグ櫛歯文土器（図6-24）は、サイズの小さい深鉢や浅鉢などである。18は幅広の隆帯に斜行櫛歯文をもち、胴部には階段状のモチーフとなる雷文が描かれる。19や20は沈線で雷文を描くが、19が菱形文を配して、その下部に横走るジグザグ文をもち、20は皿形土器で、外面に渦状の雷文、口縁上端面にも文様が表現されている。

・コンドン38遺跡（旧：マリ5遺跡）

本遺跡については、詳細が不明であるが、資料の一部が報告されている（長沼 2001）。遺跡は、ジェビャートカ川とマリ丘に挟まれた、川面からの高さ3～6mのテラス上に立地する。直径約15mの円形のマウンド状の遺構で、幅約6m、高さ約2.5mの盛土をもつ。いくつかの土器集中や石器集中などが検出されている。マウンド状遺構の性格や出土遺物の全体像等は不明であるが、公表されている土器から判断して、ボズネセンスコエ文化期の渦巻文、ジグザグ櫛歯文、雷文土器が出土している（図7-1～8、10～12）。器形の違いがあるものの、いずれも口縁部下に無文帯をもつ特徴が共通する。

渦巻文土器は、直立する口縁をもち、端部が弱く外側に開く深鉢である（図7-1・2）。地紋に密で直線的なジグザグ櫛歯文の上に、太い沈線で渦巻文または円形状の文様が描出される。口縁部下に無文帯があり、口縁部と胴部の間には二本の沈線間に充填された短櫛歯文や、沈線などによって区画されている。図7-3・4は、図7-1・2よりも細かい沈線で曲線状に描出された幾何学的な文様が描出されるが、図7-3は図7-

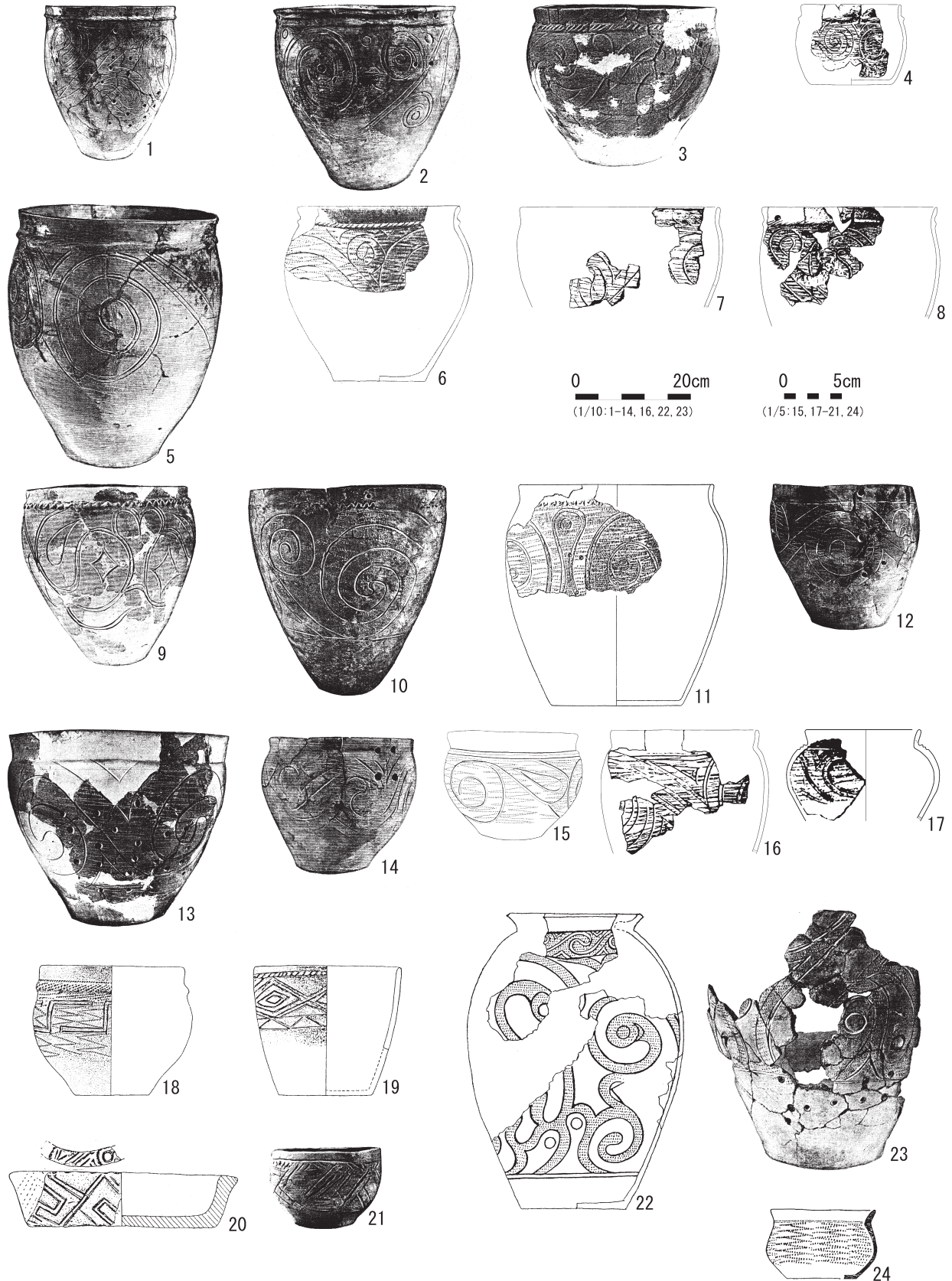


図6 地域II a コンドン1遺跡出土土器 (1~24:ゴリン式)

1・2と同じく口縁端部が弱く外側に開く深鉢である。雷文をもつ深鉢は、口縁部と胴部が明確に分かれる文様帯で構成されている (図7-5・6・8・9)。雷文は、文様帯の上下を区画し、縦方向の沈線を

上下交互に配して、その間を階段状に区画を繰り返して連結させている。こうした雷文土器はジャコバ (Дьякова) О. В. らが調査したコンドン19遺跡 (現:コンドン23~25遺跡) でも出土している (図7-9)。

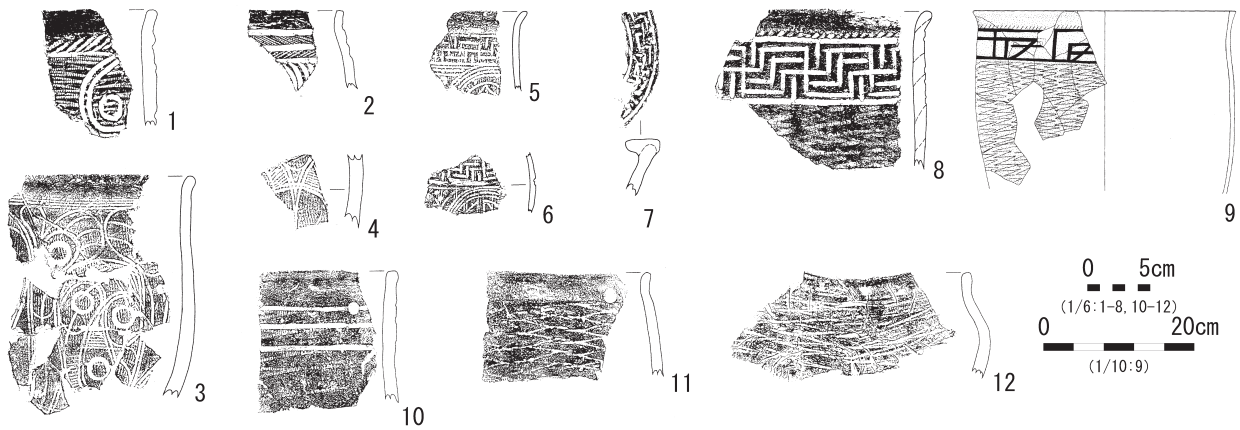


図7 地域II a コンドン38遺跡出土土器（1～8、10～12：ゴリン式）、コンドン23 25遺跡出土土器（11：ゴリン式）

図7-5・6は雷文と円形文(?)を組み合わせた文様をそれぞれ配している。器壁は薄いため小型の土器と考えられる。図7-7は幅広の口縁上端に雷文が描かれた深鉢であろう。

ジグザグ櫛歯文土器は、口縁形態は渦巻文土器と同様であり深鉢が中心となるようである(図7-10～12)。

雷文土器は、コンドン1遺跡のゴリン式とは文様構成が異なるものの、口縁部下の無文帯や口縁形態等の共通した属性から判断して、本遺跡出土の雷文土器もゴリン式の範疇で捉えることは可能である。ただし、層位的・型式学的に細別が可能であるのかは、今後本報告が刊行された後に判断したい。

地域II aのエボロン湖周辺のボズネセンスコエ文化期については、現在のところゴリン式以外の型式の状況が不明である。エボロン湖周辺は、各時代の遺跡が密集しているため、今後の調査の進展ではマラガバン式などが確認されることも想定される。

3-2-3. 地域II b

スレードネアムールスカヤ低地帯の内、アムール河とゴリン河が合流する地点から、アムール河とウスリー河が合流する地点までのアムール河本流沿岸地域である。一部ウスリー河も含む。発掘調査された遺跡は地域Iと比較して多くはないものの、オクラドニコフによる調査以来、ボズネセンスコエ文化期の主要な遺跡が確認されている。

・フミ(Хумми)遺跡(Лапшина 1999)

本遺跡はアムール川右岸に位置する。上層からボズネセンスコエ文化期の土器が出土した。ゴリン式と考えられる充填櫛目の渦巻文土器や、マラガバン式のジグザグ櫛歯文土器がある。マラガバン式の深鉢は、口縁が外側に開き、口縁部外面に一～二条の沈線がめぐり、斜行の櫛歯文や短沈線が施されている。胴部には水平方向に弧状の櫛歯文が施文されており、二段程度

の構成になるものと考えられる(図8-26)。

・ボズネセンスコエ遺跡

本遺跡は、ボズネセンスコエ文化の標識遺跡であるだけでなく、層位や遺構の切り合い関係に基づいて、アムール下流域新石器文化の変遷が確定された遺跡でもある(Окладников 1967・1972)。

調査は、1935、1965、1966、1968年に調査され、特に1966年調査については、層位と検出された遺構や出土遺物との対応関係が、オクラドニコフによる短報(Окладников 1967)と、デレビヤンコとの共著(Окладников・Деревянко 1973)で記述された。

オクラドニコフによる短報では次のとおりとなる。

1号住居址：砂質粘土層中に掘り込みをもつ竪穴住居址。櫛目・点状文土器で、櫛目を縦方向にジグザグを描きながら平行して施文させるものと赤色磨研土器との組合せ。器形は完形資料では頸部の狭まった深鉢形土器があり、土器片には整形の粗い直線的な器壁のものも含まれる。

2号住居址：下層の水成堆積層を掘り込んで構築されている竪穴住居址。菱形の型押しによるアムール編目文を施した土器と、列状三段の文様帯を持つ土器の組合せ。

砂層中の二枚の生活面出土資料：三角形の型押しを内接させた(交互に押し付けた)型押し文を充填させた土器と櫛目の型押しを垂直に短く縦方向に連続して水平の帯状に施文した円錐形の櫛目型押し土器の組合せ。前者は研磨され表面が明赤褐色化しているものが多い。

オクラドニコフとデレビヤンコの共著(Окладников・Деревянко 1973)では次のとおりとなる。

1号住居址：砂質粘土層中に掘り込みをもつ竪穴住居址。①櫛目・点状文土器(櫛目を縦方向にジグザグを描きながら平行して施文させるもの)。②渦巻沈線文土器。③櫛目・点状文と渦巻沈線文を組み合わせた土器。④人面土器を含む赤色磨研土器。器形は完形資

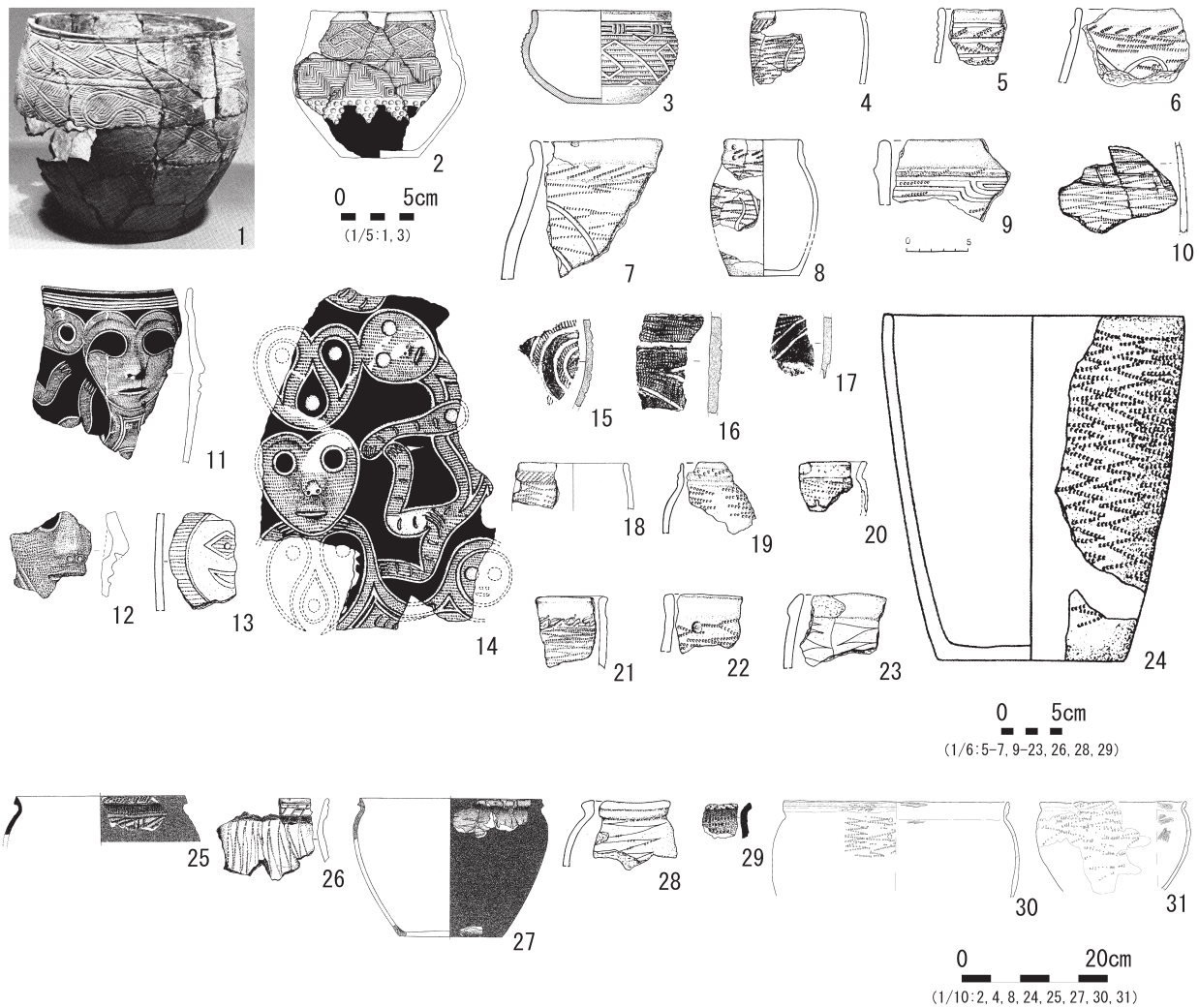


図8 地域Ⅱb 出土土器（1～24：ゴリン式、25～31：マラガバン式）

料では頸部の狭まった深鉢形土器が見られ、土器片には断面形が直線的なもの。

2号住居址：下層の水成堆積層を掘り込んで構築されている竪穴住居址。①菱形の型押しによるアムール編目文を施した土器。②口縁下に縄を巻き付けた棒を斜めに押捺した隆帯を貼り付ける。横位の隆帯を平行に貼付け、その下に順次密に施文された菱形の押型、同様の型押しの面的な充填、棒状工具による型押し文を充填して帯状に雷文を施文する土器。列状三段の文様帯を持つ土器の組合せ。

砂層中の二枚の生活面出土資料：(Окладников 1967) と同じ。

遺物のすべてが必ずしも遺構別・層位別には掘り上げられていないようであり、提示された層位からどのような土器が出土しているのか提示されていない等の問題はあるが、大貫静夫によれば、この遺跡の層位状況で確実なことは、ボズネセンスコエ文化の竪穴住居がマリシェボ文化の包含層を切り込んでいること、コンドン文化の竪穴住居はボズネセンスコエ文化のピットに切られていることから、ボズネセンスコエ文化が

マリシェボ・コンドン文化よりも新しいことがわかるものの、マリシェボとコンドンの関係は不明であるといったことである（大貫 2011・p.256～257）。

ボズネセンスコエ遺跡下層の上部から、沈線による雷文をもつ土器が出土している（図8-1・3）。図8-2も同様の雷文をもつ土器であるが、出土層位の詳細はわからないが、文様帯の構成から判断して図8-1・3と同じ層位から出土しているものと考えられる。図8-1は、内傾する口縁の深鉢で胴部に丸みがある。2段の文様帯をもち、上段には並行沈線によって雷文、下段に入組み状の渦巻文を施文した後に充填楕目文をもつ土器である。図8-2も図8-1と同じ器形であるが3段の文様帯をもつ。口縁部下には無文帯があり、上段に並行沈線による雷文、中段に逆凸形文を多重の沈線で描き、下段には三角形のモチーフとした円形の刺突文があり、底部付近は赤色磨研となる。図8-3は、口縁が直立する浅鉢である。地紋に横走する押引文が描かれた雷文をもつ。マリシェボ文化期の土器と共通する要素をもつが、主文様を沈線で描いていることから、マリシェボ文化からボズネセン

スコエ文化移行期の土器群であると考えられる。

図8-11・14は人面と考えられる文様を沈線で描出した赤色磨研土器である。

また、本遺跡では複数年にまたがって調査されており、各年度の調査区や試掘調査、表採で得られた資料の一部が紹介されている(Медведев・Филатова 1997・2002)。出土位置に不確かな点もあるが、南西部地域では数少ない資料であるため、その内容を確認すると、出土土器の多くはゴリン式のものである。渦巻文土器(図8-4~8)、雷文土器(図8-9)、ジグザグ文土器(図8-18・19・22・24)であり、口縁部下に無文帯をもつことが共通している。

渦巻文土器は、内傾する深鉢であり、隆帯をもつもの(図8-6・7・8)や数条の沈線間に斜行の櫛目文をもつもの(図8-4・5)がある。地紋に直線状の垂直ジグザグ櫛目文をもつ粗雑化した渦巻文が1~2本の沈線で描かれている。

図8-9は、階段状の文様モチーフになると考えられる雷文土器である。やや弱い隆帯が区画となる。櫛目文が部分的に充填されている。

ジグザグ櫛目文は、図8-18は内傾する深鉢で、幅広の隆帯上に斜行の櫛目文がある。また、図8-19は口縁が直立し、胴部が丸みをもつ深鉢、図8-22・24は垂直ジグザグ櫛目文が密に施文された深鉢である。

・マリシェボ遺跡

マリシェボ文化の標識遺跡である。1965年に4軒の住居址が発掘された。出土土器の内容は、1~3群に分けられて記述された(Окладников・Деревянко 1973)。その内容は次のとおりである。

1群(修理工場地区調査区の住居址出土資料):器形は深鉢と浅鉢の2種類。文様としては①櫛目による型押文土器。②櫛目型押文の地紋に隆線で菱形や編目を描いたアムール編目文土器。

2群(村はずれの調査区、集中区出土資料):①沈線文土器、②直線状に三角形、楕円形、四角形を配列した型押文土器、③二段に楕円文を配列し、その間に櫛目型押を施した土器。

3群(村はずれの調査区、住居址出土資料):赤色彩色土器で、器形は筒形土器。①櫛目による押捺で垂直方向にジグザグ文を描き、隆線や沈線を施した土器、②渦巻沈線文土器。

本遺跡の資料については、その後、住居址 No. 1・2の出土土器の一部が報告された(Медведев・Филатова 1998)。

住居址 No. 1は、船の修理工場地区(У мастерских)のものであることから、1群の資料に相当する。オクラドニコフによって新石器時代前半期に位置付けられた単一文化層の資料である。出土資料の一部から判断

すると前期コンドン文化期のコンドンI~II式に相当する(内田 2021)。ただし、マリシェボ文化期の土器(Медведев・Филатова 1998・Рис. 1-12の土器)も出土している。単層とされているが、埋土からの資料は時期差を含んでいるものと判断される。

住居址 No. 2は、マリシェボ村から400m下流に位置する。3群資料に該当すると考えられる。文化層は二層に分けられ、上層は古金属器時代ポリツェ文化期、下層が新石器文化層となる。さらに下層は、上部にボズネセンスコエ文化期、下部にはマリシェボ文化期の土器が出土しているらしい(Медведев・Филатова, 1998・p137-138)。報告された資料からボズネセンスコエ文化期の土器を抽出すると、図8-13・23・28が該当する。13・23はゴリン式、28はマラガバン式に相当する。13は沈線間に横走する細かな充填櫛目文で、目や口をもつ人面を表現したものであろう。ボズネセンスコエ遺跡(図8-11・14)やガーシャ遺跡(図8-12)出土の人面または人面を模した赤色磨研土器も櫛目と考えられる充填文で肌目が表現されているが、13よりも密で細かいものである。表現方法に違いはあるものの、いずれも充填文で人面を表現していることから近接した時間のものとしてとりあえずは理解しておく。23は内傾する深鉢で口縁が肥厚する。弧状の沈線による垂直ジグザグ文をもつ。28は口縁が短く外側に開く深鉢で、櫛目・点状文で垂直ジグザグ文が粗雑に施文されている。

・アムールサナトリー(Амурский Санаторий)遺跡

遺跡はアムール河右岸の岬上にある。1959年にオクラドニコフによって発掘調査された(Окладников 1963)。上部と下部に2つの調査区が設定された。新石器時代時代や古金属器時代の各期の遺物が多量に出土しており、層位状況は複雑である(Медведев・Филатова 2014b・p.67)が、数地点に新石器文化期の土器がまとまって出土している。ボズネセンスコエ文化期の土器は、胎土に貝殻粉砕片を混和したり、低温焼成のためきわめて残りが悪いとされる。

雷文土器は、器壁が薄いため小型の深鉢と考えられる(図8-10)。直線的なジグザグ櫛目文が地紋化し、一本の沈線で逆L字形の文様構成となる(?)雷文が描かれている。また、図8-20は、口縁部と胴部との間に段が作り出されて区画されている。口縁部は無文で、胴部には直線的な垂直ジグザグ櫛目文が施文されている。いずれもゴリン式に相当するものと考えられる。

・ノボトロイツコエ(Новотроицкое) 12遺跡

本遺跡は、アムール川とウスリー川の合流付近の支流沿いの水面からの比高6~8mの台地上にある。日露国際共同調査が実施され、竪穴住居址1軒が発掘された(Шевкомуд и др 2006・内田他 2007)。後期

新石器時代の石器製作工程を追える石器が多量に出土していることから、石器製作址と考えられる。竪穴住居の埋土からは、上層から古金属期時代ポリツェ文化の遺物が出土しているものの大きな攪乱は受けていないようである。下層から床面にかけて後期新石器時代のボズネセンスコエ文化期の土器が出土した。図 8-25・27・29～31 はマラガバン式の深鉢である。口縁の形態に着目すると、断面三角形のもの（図 8-25・27）、口縁が外側に強く開くもの（図 8-29）、外面に二条の沈線がめぐり綾杉状の櫛目・点状文を施文するもの（図 8-30）、口縁が短く外側に開くもの（図 8-31）があり、いずれもマラガバン式深鉢の典型的な口縁形態である。図 8-25 は、口縁・頸部外面が櫛目・点状文で埋め尽くされている。胴部には水平・斜行に櫛目・点状文で文様を表現している。全容がわからないため正確な文様は不明であるが、三角形の文様構成をとるのかもしれない。図 8-27 は胴部に沈線によるジグザグ文が垂直または水平に施文されている。図 8-29 は小型の深鉢の可能性ある。櫛目・点状文によるジグザグ文が頸部の屈曲部から施文されている。図 8-30・31 は、いずれも櫛目・点状文による垂直ジグザグ文が施文されるが、後者は前者に比較して粗雑な施文である。

上記以外の地域Ⅱbの遺跡として、カザケビチエボ（Казакевичево）2 遺跡やシェレメチエボ（Шереметьево）7 遺跡、同遺跡 15（Шевкомуд 2004・pp.83）でゴリン式の充填櫛目による渦巻文土器が出土している（図 8-15～17）。また、シェレメチエボ 10 遺跡（旧：シェレメチエボ 1 遺跡）では、垂直ジグザグ櫛歯文土器や、沈線による渦巻文または雷文土器、人面付き赤色磨研土器も出土しているようである（Медведев・Филатова 2016・p121）。図 8-21 は、口縁部に無文帯があり、口縁部と胴部の間には摘みによる波状文で区画され、胴部にはジグザグ櫛歯文が施文されている。

4. 各期の文様系統別検討

4-1. マリシェボ文化／ボズネセンスコエ文化移行期の土器

研究史からボズネセンスコエ文化期の土器には、ジグザグ文や沈線による渦巻文をもつものや、赤色磨研土器などがある。アムール下流域新石器時代中期後半に位置付けられるマリシェボ文化期の土器は、特に文様や器形に着目するとゴリン式に共通することが多いが、決定的に異なるのは文様描出の方法である（内田 2013）。マリシェボ文化期の土器は、ヘラ状施文具の押引文または櫛目文による波状文や入組渦巻文、雷文などが描かれる。一方、ボズネセンスコエ文化期の土

器では二条（または一本）の沈線によって渦巻文や雷文が描出され、沈線間を櫛目文で充填するものや、地紋にジグザグ文をもち、沈線間の櫛目を磨消した渦巻文や雷文がある。

ボズネセンスコエ遺跡下層の上部では、並行沈線によって雷文を施文した後に充填櫛目文をもつ土器（図 8-1）と、地紋に横走る押引文によって描かれた雷文（図 8-3）とが共存しているようである（大貫 2011・p256）。地域Ⅱaのコンドン遺跡（1962 年調査）からは、ボズネセンスコエ遺跡から出土した雷文土器と酷似する土器が出土しているようである。Okladnikov1981 の fig.110 の右側の土器は、雷文の描出される方向がボズネセンスコエ遺跡のものとは異なる。このコンドン遺跡出土土器が、どこから、どのような状況で出土したのかは短い説明文からは読み取ることが難しく、詳細がよくわからない。地域Ⅱaでの雷文土器の存在については、その存在も含めて今後明らかにされる必要がある。

一方、地域Ⅰでは、スウチュウ島遺跡 24 号住居址床面でもボズネセンスコエ遺跡出土土器と類似した雷文が出土している。ボズネセンスコエ遺跡出土土器とは異なり、櫛目文によって雷文が描出されている（図 3-2）。また、スウチュウ島遺跡 26 号住居址床面からは、マリシェボ文化期の押引文系統の土器と充填櫛目文土器が出土していることから近接した時間内にこれらの土器群が存在する可能性はある。また、同遺跡 5 号住居址からは押引文による渦巻文土器が出土しているが、文様や器形がゴリン式と類似する。スウチュウ島遺跡やボズネセンスコエ遺跡の出土状況から判断して、現状では、①押引文による渦巻文・雷文、②地紋に押引文＋沈線による渦巻文・雷文、③充填櫛目文による渦巻文がマリシェボ文化期からボズネセンスコエ文化期の移行期には存在するものと考えられる移行期については時期差と地域差に関する検討が難しいため、①～③の土器が本段階に位置付けられるものとしておく。

4-2. 渦巻文土器と雷文土器

ボズネセンスコエ文化期における主要な文様である渦巻文土器は、渦、円、そしてそれらが変形した曲線状のものがある。雷文も渦状になるものや、階段状や凸形になるもの、幾何学的なものなどバリエーションがある。精製土器の一種とされる渦巻文土器と雷文土器は、ボズネセンスコエ文化だけでなく、沿海地域の後期新石器時代のザイサノフカ文化にも存在し、さらには東北アジア地域の新石器文化編年でも広域編年の指標にされている（大貫 1992a・b、古澤 2018）。

古澤義久は東北アジア新石器時代における渦巻文

土器と雷文土器の研究史を手際よくまとめ、ザイサノフカ文化期における渦巻文土器から雷文土器への変遷、雷文土器の新しい段階での文様帯の狭小化を想定した（古澤 2018）。大貫静夫（1992b）は、渦巻文土器の分類を行い、平行沈線内を線で充填したり、平行沈線内を磨研して外側に施文する西浦項型と平行沈線内を櫛目で充填する黒狗峯型とし、後者を新しい段階に位置付けた。また雷文土器をⅠ 1→Ⅰ 2→Ⅱ段階へと三段階変遷するとした。器形変化から、渦巻の広口壺から口縁が内傾する雷文、口縁が外反する雷文、単純な深鉢へと変遷するとともに雷文の文様帯の狭小化を想定し、方形の雷文の系列（a 系列）と菱形・三角形の雷文の系列（b 系列）が併存しながら変遷するとした。

それでは、アムール下流域における渦巻文と雷文の変遷は東北アジア各地域の変遷と比較して、どのような変遷をたどるのであろうか。

シェフコムードは、カリチョーム編年でゴリン式、ウディリ式、オレリ式、マラガバン式への変遷において、渦巻文土器の簡略化、雷文土器の消失といった変遷を想定している（Шевкомуд 2004）。また、伊藤慎二は、渦巻文・雷文の系統変化を想定して、古段階 a 期：渦巻文・雷文の盛行、古段階 b 期：渦巻文の簡略化・雷文の狭小化、新段階：渦巻文の消滅・雷文の簡略化が見られるとした（伊藤 2006）。

今回本論で検討した各型式の内容から渦巻文と雷文の変遷を見てみると、渦巻文については、マリシェボ文化期の精緻な渦巻文から、ゴリン式の前半段階（コンドン遺跡群出土土器段階）では大振りな渦巻文や幾何学的な曲線文が盛行し、ゴリン式後半段階（カリチョーム 3 遺跡出土土器段階）に至って渦巻文やその間の連結も粗雑化する。ウディリ式では粗雑化した渦巻文や円文などとなり、渦巻文が全体に占める割合は少なくなっていく。マラガバン式では変形した曲線文が見られるのみとなる。渦巻文の系統はマラガバン式までは存在するが、減少していく。ただし、この変遷は地域Ⅰのアムール河口部周辺では確認できるが、地域Ⅱではゴリン式以降の渦巻文の変遷は不明である。

雷文土器については、マリシェボ文化／ボズネセンスコエ文化移行期では直線的な沈線で入組み状の雷文のモチーフをもつものがあり、地域Ⅰのスサニノ 4 遺跡やマラヤガバン遺跡出土のゴリン式では、初頭期の雷文が形態化したと考えられる三角形モチーフの文様が見られる。また、雷文の種類には、階段状形、凸形、方形、菱形があり、ゴリン式からウディリ式まで各種の文様バリエーションが見られるが、雷文は狭小化していき、マラヤガバン式では見られなくなる。また、雷文土器は相対的にサイズが小さい土器に用いら

れることが多く、渦巻文が器種の違いや土器のサイズを超えて、広く使用されるモチーフであることは少し位置が異なるのかもしれない。雷文土器における変遷は地域Ⅰでは比較的わかりやすいが、地域Ⅱでは資料がほとんどないためよくわからない。しかし、ここで注意しておきたいのは、マラガバン式のジグザグ文である。沈線で描かれる渦巻文や雷文などの文様は、基本的にウディリ式以降減少するか消失する。マラガバン式では、櫛目・点状文によって三角形の文様構成をとるものがある（図 3-32、図 4-31・33、図 8-25 など）。この土器は地域Ⅰ・Ⅱ b に存在する。こうした三角形モチーフのジグザグ文が、沈線で描出する雷文の系統にできるかは議論の余地は残されるものの、その可能性だけは指摘しておきたい。

4-3. ジグザグ文土器

ジグザグ文には施文具によって、櫛目（櫛歯）によるものと沈線によるものに大別される。ジグザグ文の形態は、直線と弧線の 2 種に分けられ、施文の方向は垂直か水平となり、それらを組み合わせたものもある。総じてジグザグ文は重複することは少なく、一つの単位として施文されている。櫛（歯）の場合は、①櫛の単位が長方形で目が細かいもの、②方形・長方形で一定の間隔のあるもの、③点状のものがある。シェフコムードは、ジグザグ櫛歯文を施文具の違いからローラー型（①）と櫛歯型（②・③）に分けた。ゴリン式には①、ウディリ式には②、マラガバン式には③のものが使用されている。

各型式でのジグザグ文の状況を見てみると、ゴリン式やウディリ式では、ジグザグ文が地紋化するものと、ジグザグ文のみで構成される土器がある。地紋となるジグザグ文の場合には、垂直方向に施文され、縦に分割されたジグザグ文が横方向に展開するものが多く、水平方向に施文されるものは今のところ確認できない。オレリ式では、口縁部の凸部に斜状または綾杉状に施文されるが、胴部は無文とされるようである。マラガバン式では、オレリ式と同じく口縁部にも施文されるものがあるが、主に胴部を中心に施文される。マラガバン式では、垂直・水平・それらの組合せをもつもので構成され、ジグザグ文が主文様となるが粗雑化する。

オレリ式については、現在のところ口縁部資料を中心に型式が設定されているが、その属性内容はマラガバン式に極めて類似する。サハリン北部地域のイムチン文化との関係を念頭におけば、オレリ式がマラガバン式以前に位置付けられる可能性は高いが、オレリ式とマラガバン式を同一の系統下にあるものとして考えた方が、時間的な先後関係はわかりやすい。

4-4. マラガバン式土器以後

マラガバン式以後については、地域Ⅰでは、ボズネセンスコエ文化／コッピ文化移行期となり、その境界の年代は 3400～3000BP である。地域Ⅱではマラガバン式から古金属器時代のウリル文化期までその様相は不明である。

本論では、スウチュウ島遺跡 1972～1974 年調査 (Okladnikov et al. 2015, Медведев・Филатова 2018a・b) 資料 (図 3-37～39) が終末期新石器時代に位置付けられる可能性があることを指摘した。この無文土器の一群の資料として、筆者らが調査したボゴロドスコエ 24 遺跡の竪穴住居址から一括出土の資料が得られており、木炭や土器付着炭化物による年代値からもボズネセンスコエ文化後半からコッピ文化移行期に相当することがわかっている (Учида et al. 2017)。本遺跡からは、無文土器とともに少量ではあるがコッピ式土器も出土している。コッピ式については、大局的にみた場合、ボズネセンスコエ文化期の土器の器形や胎土等から、系統的な関係が想定されている (Шефкомурд 1998)。しかし、マラガバン式とコッピ式と関係については時間的な隔りがある。シェフコムードは、ボズネセンスコエ文化期における有文土器、特に渦巻文系統の土器とコッピ式の縄線文土器との類似性を見出しているようであるが、マラガバン式における櫛歯文の粗雑化や無文化の傾向からみる限り、コッピ式との文様系統上のつながりを見出すことは難しいものと考えられる。

ボゴロドスコエ 24 遺跡で出土した無文土器の一群は、スウチュウ島遺跡出土資料とは異なり、口縁が外側に強く外反するといった特徴がある。ボズネセンスコエ文化期／コッピ文化期移行期については、検討できる資料がまだ少ないため、今後も引き続き検討が必要である。

5. まとめと課題

最後に、本論で検討した各型式と各土器の系統関係の内容を整理し、今後の課題と合わせてまとめたい。

- (1) マリシェボ／ボズネセンスコエ文化移行期については、良好な一括資料や年代測定値がいまのところ得られていない。地域Ⅰ・Ⅱ b では、①押引文による渦巻文・雷文、②地紋に押引文＋沈線による渦巻文・雷文、③充填櫛目文による渦巻文が存在する。
- (2) 渦巻文土器については、マリシェボ文化期の精緻な渦巻文から、上記 (1) の②・③の段階を経て、ゴリン式の前段階には大振りな渦巻文や幾何学的な曲線文、後半段階には渦巻文やその間の連結

も粗雑化する。ウディリ式ではさらに粗雑化・形骸化した渦巻文や円文となり、マラガバン式では変形した曲線文となる。渦巻文はゴリン式までは盛行するが、ウディリ式・マラガバン式に至って減少していく。

- (3) 雷文土器については、初頭期では直線的な沈線で入組み状の雷文のモチーフをもつものから、ゴリン式では雷文の形骸化した三角形状モチーフとなる。また、雷文の種類には、階段状文、凸形、方形、菱形があり、ゴリン式からウディリ式まで各種の文様バリエーションが見られ、雷文は狭小化し、マラガバン式では消失する。ただし、マラガバン式の櫛目・点状文による三角形状モチーフとの関係については引き続き検討が必要である。
- (4) ジグザグ文土器については、ゴリン式やウディリ式では、ジグザグ文が地紋化するものやジグザグ文のみで構成されるものが併存する。オレリ式やマラガバン式では、口縁部や胴部に櫛目・点状文が施文されるが、粗雑化していく。
- (5) オレリ式については、マラガバン式と共通する属性が多く、同一系統の土器型式内の細分として捉える方が、時間的先後関係の整理がしやすい。
- (6) マラガバン式以後については、現在のところ資料が断片的であるが最近、福田正宏によって提唱された「ルチェイキ式 (ручейкинский тип)」 (福田他編 2021) が注目される。コッピ式と並行する時期のものであり、アムール河と松花江の合流地点からアムール河と烏蘇利江が合流する地点一帯に暫定的に分布するとされている。マラガバン式後の無文土器の一群と、ルチェイキ式土器やコッピ式土器と関係については今後検討が必要である。

謝辞

故シェフコムード И. Я. 博士からは、アムール下流域での調査を通じて、ボズネセンスコエ文化期の土器について具体的な資料を前にしながら多くのご教示・ご指導を得た。本論をまとめるにあたり、佐藤宏之教授、福田正宏准教授、根岸洋准教授からは有益なコメントをいただいた。コンドン遺跡及びスウチュウ島遺跡の出土資料の見学に際しては、デレビヤンコ A. П. 博士とメドベージェフ B. E. 博士、小野昭博士から多くのご配慮をいただいた。また、以下の諸先生、諸氏からも現地調査や資料見学、ロシア語文献収集において多くのご協力を得た。記して感謝いたします (敬称略・五十音順)。

なお、多くの方々からご助言・ご指摘を受けたが、本論で十分にその意図を反映できていない場合には、

当然ながら筆者の責であることを明記しておく。
出穂雅実、大貫静夫、加藤博文、國木田大、熊木俊朗、
ゴルシュコフ M. B.、張恩恵、瀧千穂、中澤寛将、
夏木大吾、長沼正樹、橋詰潤、松本拓、森先一貴

註

- 1) 本論で初出のロシア語については日本語表記の後にロシア語を記した。なお、同一遺跡・同一人名であっても、論者・訳者によって日本語表記に一致をみないことがあるが、引用文献の提示では各原典に即して記している。
- 2) メドベージェフによる器形のロシア語原義を説明すると、シチュー鍋形は、寸胴形の土器である。また壺とされるものも頸部を持ち口縁が外側に開いたりする土器のことを指している。
- 3) ガリゾントとは、旧地形の地表面を想定する際に、炭化物の分布、黄色の斑点、間層、コンプレックス、遺物集中の存在から、岩質学・層位学的な特徴によって区別される層位法の一つである。
- 4) 残りは古金属器時代の長方形の窪みで、台地に沿って並列している。
- 5) 廃棄され、窪みとして残された住居を再利用する居住活動はエボロン湖周辺だけではなく、アムール下流域でよく見られる考古学的現象である。コンドン1遺跡の場合、公表されている資料の多くが、中期前半のコンドン文化期か後期のボズネセンスコエ文化期のものである。遺跡内では円・方形の住居平面形が検出されているが、この平面形の違いが、窪みの再利用の違いを反映しているのか、時期差であるのか、同時期併存の異なる住居であるかはなお検討を要するものの、土器型式の時期は中期前半か後期前葉にまとまるようである。
- 6) なお、3号住居址は、コンドン1遺跡の他の住居址とは異なる特徴がある。炬が伴わず、石棒や土偶などが出土していることから集落内での特別な建物であった可能性が指摘されている(Окладников 1983・p.20。)

引用文献

(日本語)

- ア・ペ・オクラドニコフ 1975 「フンガリ川河口近くのヴォズニェセノフカ村近くの集落址」『シベリア極東の考古学1 極東篇』: 岩本義男・大塚和義・中島寿雄・中村嘉男訳, 河出書房新社, 422-424 (原著: Окладников А. П. 1967 Поселения у с. Вознесенка вблизи устья р. Хунгари. *Археологические открытия 1966 года*: 175-178)
- 伊藤慎二 2006 「ロシア極東の新石器文化と北海道」『東アジアにおける新石器文化と日本』Ⅲ: 59-94
- 内田和典 2011a 「アムール下流域の新石器時代土器編年」『東アジアにおける定着的食料採集社会の形成および変容過程の研究』東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設, 149-177
- 内田和典 2011b 「ロシア極東新石器時代の土製施文具について」『琵琶湖と地域文化』林博通先生退任記念論集刊行会, 409-414
- 内田和典 2013 「極東東・南部地域の中期新石器土器型式研究—アムール下流域マリシェボ文化を中心に—」『北海道考古学』49: 1-16
- 内田和典 2021a 「アムール編目土器の細別と展開」『東京大学考古学研究室研究紀要』34: 85-106
- 内田和典 2021b 「オクラドニコフ A. П. によるシベリア・極東新石器文化研究史の覚書—コンドン文化を中心に—」『東アジアにおける温帯性新石器文化の北方拡大と適応の限界(Ⅱ)—

- ルチェイキ1遺跡の研究—』東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・附属北海文化研究常呂実習施設, 101-109
- 内田和典・I. シェフコムート・松本拓・M. ガルシコフ・S. コスチナ・橋詰潤・山田昌久・大下明 2007 「ロシア共和国ハバロフスク州ノヴォトロイツコエ12遺跡」『考古学研究』54(1): 115-118
- 大貫静夫 1992a 「極東の先史文化」『季刊考古学』38: 17-20
- 大貫静夫 1992b 「豆満江流域を中心とする日本海沿岸の極東平底土器」『先史考古学論集』2: 47-78
- 大貫静夫 1998 『東北アジアの考古学』世界の考古学9 同成社
- 大貫静夫 2010a 「北東アジア新石器社会の多様性」『東北アジアの歴史と文化』北海道大学出版会, 71-86
- 大貫静夫 2010b 「縄文文化と東北アジア」『縄文時代の考古学1: 縄文文化の輪郭』同成社, 141-153
- 大貫静夫 2011 「アムール編目土器の終焉と周縁」『東北アジアにおける定着的食料採集社会の形成および変容過程の研究』東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設, 243-264
- 加藤晋平 1978 「北方農耕覚え書④」『季刊どるめん』17: 125-134
- 加藤博文 1998 「櫛目渦巻文土器について—コンドン遺跡3号住居址出土土器群の検討—」『北東アジアにおける新石器文化の変遷と多様性の研究』: 36-46
- 加藤博文編 1998 『北東アジアにおける新石器文化の変遷と多様性の研究』筑波大学地域研究研究科
- 加藤博文・石井淳 1998 「アムール川下流域における考古学調査報告(1997年度)」『筑波大学先史学・考古学研究』9, 57-96
- 國木田大 2019 「第4章 土器付着物でわかる年代と食生活」小林謙一編『土器のはじまり』同成社: 83-105
- 國木田大 2021 「アムール川下流域における新石器文化の年代研究」『北海道大学考古学研究室研究紀要』1, 27-40
- 國木田大・I. Shevkomud・吉田邦夫 2011 「アムール下流域における新石器文化変遷の年代研究と食性分析」『東アジアにおける定着的食料採集社会の形成および変容過程の研究』東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設, 201-242
- シェフコムード I. 1998 「環状縄線文土器について」『北の文化交流史研究事業』中間報告』: 渡辺直子訳, 北海道開拓記念館 101-108
- 長沼正樹 2001 「アムール下流域における新石器時代集落遺跡の調査報告—マリ5遺跡 2000年度発掘調査略報」『第2回北アジア調査研究報告会』: 17-26
- 福田正宏 2007 『極東ロシアの先史文化と北海道』北海道出版企画センター
- 福田正宏 2018 「縄文文化の北方適応」『国立歴史民俗博物館研究報告』208: 9-44
- 福田正宏・シェフコムード I. Ya 編 2005 『アムール下流域における新石器時代から初期鉄器時代への文化変容についての研究—ゴールィムイス1遺跡における発掘調査とその成果の報告—』東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究所実習施設
- 福田正宏・I. Shevkomud・熊木俊朗・國木田大・内田和典・森先一貴・M. Gorshkov・S. Kosityna・E. Bochkareva・吉田邦夫・佐藤宏之・大貫静夫 2011 「アムール河口域の考古学的調査(2010年度)」『第12回北アジア調査研究報告会』: 28-31
- 福田正宏・ガブリルチュク M. A.・張恩恵 2021 『東アジアにおける温帯性新石器文化の北方拡大と適応の限界(Ⅱ)—ルチェ

- イキ 1 遺跡の研究—』東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・附属北海文化研究常呂実習施設
- 福田正宏・シェフコムード I.Ya.・内田和典・熊木俊朗編 2011 『東北アジアにおける定着的食料採集社会の形成および変容過程の研究』東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設
- 古澤義久 2018 『東北アジア先史文化の変遷と交流』六一書房(ロシア語)
- Деревянко, А. П. 1973 Ранний железный век Приамурья. Наука
- Деревянко, А. П., Медведев, В. Е. 1996 Остров Сучу- уникальный памятник археологии Дальнего Востока. *Археология Северной Пацифики*. Владивосток: Дальнаука. С.214-221.
- Деревянко, А. П., Медведев, В. Е. 1997 К итоги раскопок на о. Сучу в 1995 и 1997гг. *Проблемы археологии, этнографии, антропологии Сибири и сопредельных территорий*. 3. с.52-57. ИАЭТ СО РАН. Новосибирск.
- Деревянко, А. П., Чо Ю-Джон, Медведев, В. Е., Ким Сон-Тэ, Юн Кын-Ил, Хон Хён-У, Чжун Сук-Бэ, Краминцев, В. А., Кан Ин-Ук, Ласкин, А. Р. 2000 *Отчёт о раскопках на острове Сучу в Ульском районе Хабаровского края в 2000 г.* ГИИKN РК-ИАЭТ СО РАН. Сеул.
- Деревянко, А. П., Чо Ю-Джон, Медведев, В. Е., Юн Кын-Ил, Хон Хён-У, Чжун Сук-Бэ, Краминцев, В. А., Медведева, О. С., Филатова, И. В. 2002 *Исследования на острове Сучу в Нижнем Приамурье в 2001 г.* ГИИKN РК-ИАЭТ СО РАН. Сеул.
- Деревянко, А. П., Чо Ю-Джон, Медведев, В. Е., Шин Чан-Су, Хон Хён-У, Краминцев, В. А., Медведева, О. С., Филатова, И. В. 2003 *Неолитические поселения в низовьях амура (отчет о полевых исследованиях на острове Сучу в 1999 и 2002 гг.)*. ГИИKN РК-ИАЭТ СО РАН.
- Дьякова, О. В., Дьяков, В. И., Сакмаров, С. А. 2002 Археологические памятники поселка кондон на Нижнем Амуре. *Актуальные проблемы Дальневосточной археологии*. 11, С.151-190, Дальнаука..
- Конопацкий, А. К. 1986 Работы на Нижнем Амуре. *Археологические открытия 1984 года*, С. 178-179, Наука.
- Конопацкий, А. К. 1990 Керамика эпохи неолита в памятнике Сусанино- 4 (Нижний Амур). *Древняя керамика Сибири*, С. 9-18, Новосибирск.
- Лашина З.С. 1999 *Древности озера Хумми*. ПГО.
- Медведев В.Е. 2005а Неолитические культуры Нижнего Приамурья. *Российский Дальний Восток в древности и средневековье: открытия, проблемы, гипотезы*, С.234-267, Владивосток.
- Медведев В.Е. 2005b Неолитические культовые центры в долине Амура. *Археология, этнография и антропология Евразии*. 24 (4): 40- 69.
- Медведев, В. Е. 2008 Мариинская культура и ее место в неолите Дальнего Востока. *Всероссийского археологического съезда. Труды II(XVII) I*, С.244-248, ИА РАН.
- Медведев В.Е., Филатова И.В. 1997 О соотношении керамики из культурных слоев поселения у с. Вознесенского (Приамурье). *Проблемы археологии, этнографии, антропологии Сибири и сопредельных территорий* 3: 117-122.
- Медведев В.Е., Филатова И.В. 1998 Об орнаментации глиняных сосудов из жилищ эпохи неолита у с. Малышево в Приамурье. *Проблемы археологии, этнографии, антропологии Сибири и сопредельных территорий* 4: 134-139.
- Медведев, В. Е., Филатова, И. В. 2002 К характеристике орнамента неолитической керамики Вознесенского поселения. *Археология и культурная антропология Дальнего Востока и Центральной Азии*, С.42-57, Владивосток.
- Медведев В. Е., Филатова И. В. 2014а *Керамика эпохи неолита нижнего Приамурья*. ИИАиЭ СО РАН.
- Медведев В. Е., Филатова И. В. 2014б Поселение Амурский Санаторий_неолитические комплексы. *Проблемы археологии, этнографии, антропологии Сибири и сопредельных территорий* 20: 65-69.
- Медведев В. Е., Филатова И. В. 2016 Неолитические комплексы у села Шереметьево (по материалам исследований 1958-1959 годов). *Проблемы археологии, этнографии, антропологии Сибири и сопредельных территорий* 22: 118-121.
- Медведев В.Е., Филатова И.В. 2018а Итоги исследований материалов с острова Сучу (1974 год, раскоп D). *Археология, Этнография и Антропология Евразии*. 46 (4): 22 -32.
- Медведев В.Е., Филатова И.В. 2018b Каменный инвентарь поселения Сучу (1975 год, раскоп I, жилище В). *Теория и практика археологических исследований*.23(3): 70-83.
- Медведев В. Е., Филатова И. В., Гирченко Е. А. 2020 Результаты физико-химических исследований неолитической керамики поселения Богородское-24 (Нижнее Приамурье). *Теория и практика археологических исследований*. 31(3): 154-171.
- Мыльщикова Л. Н. 1999 *Гончарство Неолитических племен Нижнего Амура*. ИИАЭТ СО РАН.
- Окладников А. П. 1963 Археологические раскопки в районе Хабаровска. *Вопросы географии Дальнего Востока*. 6: 255-282.
- Окладников А. П. 1970 Неолит Сибири и Дальнего Востока. *Каменный век на территории СССР*, С.172-193, Наука.
- Окладников, А. П. 1972 Отчет о раскопках древнего поселения у сел а Вознесенского на Амуре, 1966 г. *Материалы по археологии Сибири и Дальнего Восток I* , С. 3-35, Новосибирск.
- Окладников, А. П. 1980 О работах археологического отряда амурской комплексной экспедиции в низовьях амура летом 1935 г. *Источники по археологии Северной Азии (1935-1976 гг.)*. С. 3-52, Новосибирск.
- Окладников, А. П. 1983 *Древнее поселение Кондон (Приамурье)*. Наука.
- Окладников, А. П. 1984 *Керамика древнего поселения Кондон (Приамурье)*. Наука.
- Окладников, А. П., Деревянко, А. П. 1973 *Далекое прошлое Приморья и приамурья*. Дальневост. книжн. изд-во.
- Окладников, А. П., Медведев, В. Е., Филатова, И. В. 2015 Первые стационарные исследования с получением радиоуглеродных дат на острове Сучу (1972 год). *Археология, этнография и антропология Евразии* 43 (3): 50-63.
- Филатова И. В. 2008 *Орнаментальные традиции Нижнеамурского неолита*. Автореферат диссертации на соискание ученой степени кандидата исторических наук. ИИАЭТ СО РАН.

- Шевкомуд, И. Я. 2004 Поздний Неолит Нижнего Амура. ДВО РАН.
- Шевкомуд, И.Я. 2008 Коппинская культура и проблема перехода от неолита к палеометаллу в нижнем приамурье. Столетие Великого Агэ. Владивосток. С.157-181.
- Шевкомуд, И. Я., Горшков, М. В., Ямада, М., Учиды, К., Мацумото, Т., Косицына, С. Ф. 2006 Предварительные результаты исследования поселения Новотроицкое-12— мастерской сердоликовых наконечников (Нижний Амур). *Пятые Гродковские чтения*. Хабаровск. С. 133-138
- Шиповалов А. М. 2014 История исследований эврон-горинского георхеологического района. 『環日本海北回廊の考古学的研究 (I)』: 117-140
- Шубин, В. О., Шубина, О. А. 1984 *Новые радиоуглеродные датировки по археологическим памятникам сахалинской области. Препринт*. Южно-сахалинск.
- Учиды, К., Шевкомуд, И. Я., Ямада, М., Куникита, Д., Горшков, М. В., Косицына, С. Ф., Бочкарёва, Е. А., Имаи, Ч., Мацумото, Т. 2017 Результаты Исследования Поселения Богородское-24 в 2008 г. в нижнем Приамурье. *Археология CIRCUM-PACIFIC: памяти Игоря Яковлевича Шевкомуда*, С.112-120, Владивосток.
- Яншина, О. В. 2018 Керамика поселения Имчин-2 и некоторые проблемы изучения имчинской культуры. *Мультидисциплинарные исследования в археологии*. 1: 40-58 (英語)
- Okladnikov A. P. 1981 *Acient art of the Amur Region*. Aurora art publishers.

挿図出典

- 図1・2:筆者作成
- 図3-1・4・6~10・12~16:スウチュウ島遺跡26号住居址 (Деревянка и др 2001・Рис.68、83-①、108-①、53-②、52-①、64-②、61-⑤、62-②、50-②、52-②、53-①、13-②、23,)、図3-2・3・5:スウチュウ島遺跡24号住居址 (Деревянка и др 2000・Рис.32、20-②、24)、図3-17・18・20~22・25・27・40:スウチュウ島遺跡1974年調査 (Медведев, Филатова 2018a・Рис. 3-24・28・40・39・32・35・33・41)、図3-19・23・37・38:スウチュウ島遺跡1973年調査 (Медведев, Филатова 2016・Рис. 3-17、3-19・25・26)、図3-24・26・39:スウチュウ島遺跡1972年調査 (Окладников и др 2015・Рис. 6-13・14・15)、図3-28~36:スウチュウ島遺跡83号住居址 (Деревянка и др 2003・Рис.83-③、83-②、83-①、83-④、83-⑤、169-②、173-①、162、85)
- 図4-1~6・7~9・10~37:カリチョーム3遺跡 (Шевкомуд 2004・Таблица.56-2、55-2、55-1、56-1、47-6・7、57-1・А・Б・В、47-5・1・8、45-3・4、46-7、45-2・1、48-2、42-1・2、44-1・4・6、48-1、42-4・3・5、51-4、49-3・5、50-1、51-2、54-2、49-1・2・4、50-2)。図5-1~6・15・16:ギルマン遺跡 (加藤・石井 1998・図7-1・2・5・6・9・7・11・12)、図5-7~12、18、67、68:ロガチョフスキー島遺跡 (Шевкомуд 2004・Таблица.30-1・2・3・4・6・8・10・11)、図5-13・14:ロガチョフスキー島遺跡 (福田・Shevkomud 他 2011・第3図7・8)、図5-17・22・41~43:マラヤガバニ遺跡 (福田他編 2011・fig.16-42・39・43・44・46)、図5-25・

- 73:マラヤガバニ遺跡 (Шевкомуд 2004・Таблица.34-20・21)、図5-19~21・23・24・26・27・50:スサニノ4遺跡 (Конопацкий 1990・Рис. 3、Рис. 4-3・2・1、1-1、Шевкомуд 2004・Таблица.35-6・7・9)
- 図5-28・33~36・40・46~49・66:ゴールイムイス5遺跡 (Шевкомуд 2004・Таблица.28-10・9、31-7、27-1・3・2、26-1、28-5・9・7、31-4)、図5-29~32・37~39・44・45・51~54・57~59・64・65・69~72:カリチョーム2遺跡 (Шевкомуд 2004・Таблица.59-3、60-3・10・11、59-2、59-5・6・4、60-4・1・2・8・7・9、61-1・2・10・9、59-7、61-11・8・12)、図5-55・56:ダリジャ3遺跡 (福田・Shevkomud 他 2011・第3図21、筆者実測)、図5-60・61:ゴールイムイス1遺跡 (Шевкомуд 2004・Таблица.31-2・1)、図5-62・63:スタラヤカコルマ遺跡 (Шевкомуд 2004・Таблица.33-1・2)
- 図6-1・2・6・12~15・21・23:コンドン1遺跡3号住居址 (Окладников 1984・Табл.19-2、22-2、27-8、20-2、21-2、23-2、26-2、24-2、25-4)、図6-3:コンドン1遺跡13号住居址 (Окладников 1984・Табл.44-2)、図6-4・7~8・10・16~17:コンドン1遺跡2号住居址 (Окладников 1984・Табл.16-4・7・8の断面を再トレース、Табл.15、Табл.16-6・2の断面を再トレース)、図6-5、19~20、24:コンドン1遺跡7号住居址 (Окладников 1984・Табл.46、42-6・9・5)、図6-9・18:コンドン1遺跡9号住居址 (Окладников 1984・Табл.42-2・11)、図6-11・22:コンドン1遺跡5号住居址 (Окладников 1984・Табл.36、35-2)
- 図7-1~8、10~12:コンドン38遺跡 (旧:マリ5遺跡) (長沼 2001・第7図1・2・12・14、第9図6・7・5・1、第8図4~6)、図7-9:コンドン23~25遺跡 (旧:コンドン19遺跡) (Дьякова и др 2002・Рис.22)
- 図8-1~9・11・12・18・19・22・24:ボズネセンスコエ遺跡 (Okladnikov 1981・112、Филатова 2008・Рис.71-5、Окладников 1975・第144図・Медведев, Филатова 2002・Рис. 5-2、4-4・2・1、5-1、4-15、Медведев 2005b・Fig 8-1、5-1、Медведев, Филатова 2014・Рис.56-3、Медведев, Филатова 2002・Рис. 4-5・3、5-4)、図8-10・20:アムールサナトリー遺跡 (Медведев, Филатова 2014b・Рис. 1-18・16)、図8-13・23・28:マリシェボ遺跡2号住居址 (Медведев, Филатова 1998・Рис. 2-7・11・9) 図8-15:カザケビチェボ2遺跡 (Шевкомуд 2004・Таблица.62-5)、図8-16:Шелемечево7遺跡 (Шевкомуд 2004・Таблица.62-1)、図8-17:Шелемечево15遺跡 (Шевкомуд 2004・Таблица.62-4)、図8-21:Шелемечево10集落遺跡 (Медведев, Филатова 2016・Рис. 2-11)、図8-25・27・29~31:ノボトロイツкоエ12遺跡 (Шевкомуд и др 2006・Таблица. 2-2・1、1-16、内田他 2007・図5)、図8-26:フミ遺跡 (Лашина 1999・Таблица.19)。

略号表記

- ГИИKN РК: Издательство Государственный Исследовательский Институт Культурного Населения Республики Корея.
- ДВО РАН: Дальневосточное отделение Российской академии наук.
- ИИАЭт СО РАН: Институт Археологии и этнографии Сибирского отделения Российской Академии Наук.

Locality of Pottery during Voznesenskoye Culture Period

Kazunori UCHIDA

This paper analyses the subdivision of each type, the systematic relationship of each pottery pattern, and the regional characteristics of Voznesenskoye culture period in the Lower Amur River basin. For analysis, the Lower Amur region divided into the Amur River Mouth (Region I) and the Amur River Plain (Region II). Region II is further subdivided into the region around Lake Evolon (Region IIa) and the coastal region of the Amur River (Region IIb). It is examined the contents of each type, focusing on spiral, meander, and zigzag pottery. Voznesenskoe culture period, is expected four stages of transition. The examination results are summarized as follows.

(1) Malyshevskoe / Voznesenskoe during the cultural transition period, good collective data and dating values are currently unknown. In the Region I and IIb, ① spiral / meander pattern by liner pattern of tinny square impressions created by obliquely pressing and dragging into the surface, ② liner pattern of tinny square impressions created by obliquely pressing and dragging into the surface + spiral / meander pattern by incised line, and ③ spiral / meander pattern filling comb pattern. (2) Spiral pattern pottery: exquisite spiral pattern in Malyshevskoe culture period, the ② and ③ stage, large spiral pattern and geometric curve pattern in first half stage of Gorin type, roughly spiral pattern and connections between them in second half Stage of Gorin type, more roughly spiral and circle in stage of Udył' type, deformed curved lines in stage of Mala Gavan type. Spiral pattern is popular up to the Gorin type, but decrease in the Udył' type and Mala Gavan type. (3) Meander pattern pottery: interlocking hook meander pattern by a straight incised line in the beginning of a period, a triangular motif of more roughly meander pattern in stage of Gorin type. The meander pattern narrows at the stage from Gorin type to Udył' type, and disappears in the stage of Mala Gavan type. (4) Zigzag pattern pottery: Gorin type and Udył' type are composed coexist with background of zigzag pattern and only zigzag pattern. (5) The Orel' type has many attributes in common with the Mala Gavan type, and it is easier to sort out the temporal and posterior relationships by considering it as a subdivision within the pottery type of the same system. (6) Post Mala Gavan type, there is a group of plain pottery before Koppi type. It is necessary to consider the relationship with the recently proposed "Rucheiki type pottery".